5756

楪柳

089876-000-4

特10-174

絲柳

紙蔦堂　風来／編

M26

DBN-0151

絲柳序

初代風來山人平賀鳴溪の如き不遇奇傑の士なり。志望を當時に達せず。世を欺き冷嘲。文墨諷刺の間に弄し。僅かに鬱悶を排するのみ。若はす所の數篇載せて六々部集等にあり。絶俗の士常に群小の反目を惹て。此人彼れり。然れども遂に終焉を合せず。悼しい哉。絶倫不祀の鬼とはなる。文墨の德は不滅なり。爾來山人の高才を慕ひ。その筆する者。年を超にて益す盛し。況んや明治照代。文華方する時に當り。進んで山人の戲号を冒し。以てその餘する者在りしに於てをや。蓋し此の書二世紙高堂の山人の高才に私淑し。遊計する處鮮少からざりしを知るべく一讀縱横の才筆を窺ふに足らむ。今や衛畢予に卷端の辭を需む。乃ち聊か予が識る處を敘して與ふると云爾

癸巳三月

梅窓學人誌

目次

第一章　黄鳥の身を逆しまにはつ音哉
第二章　青柳の泥に枝垂るゝ汐干かな
第三章　見たき物花紅葉より接木かな
第四章　春雨の今日ばかりとて降に勇
第五章　聞く迄は二階に寐たり黒羽鳥
第六章　雨に人たちもとはるや燕子花
第七章　とちから移るぞ庭に今年竹
第八章　ひら〳〵と木の葉動きて秋ぞ立
第九章　旅人の寐みゝにきかす雪の丈
第十章　玉の緒よ絶なばたにね殿の味
第十一章　木枯の果へありけり海のおと

以上

第一章　黄鳥の身を逆しまに初音かな

形見の歌のもれなる世なりとも思ひうめてん人は忘れじと古今に家と父母の最も重き恩さへ餘所にうち棄て自己も圖らず光榮の河内策に陥り付けのながれの淵に沈みしも覓に若節を全ふして情夫の誤認たる夫婦の者を殺果しつ忽ち菩提の道に入り國頭郡成の妻容となり生涯念佛三昧に行ひすましゝ長物語りのろの柳を湖ぼる二十餘年前徳川將軍家茂公國家の政權を執り給ふ文久二年の頃かとよ相州小田原の城主大久保忠眞ぬしの家臣に其祿四百石を賜はれる國部和太夫と云ふ者ありけり妻へ齢年身故りて渠に兩個の男子あり舍兄を和喜太舍弟を和三郎と呼び做しッゝ家最と富裕に暮しゝが雷家に年來召使ふお

絲と云へる侍女は同七藩邸の足輕役磯野平六が長女にして年紀は漸やく十八を越路の雪も欺くべき瑤の肌の容顔にこれを見知れる壯俠等は竊に意表を惱しッ、互ひに評し敢りとぞ然るに國部和三郎は今茲二十三四にて文學武藝は云ふもさらなり俳諧茶湯遊藝の道にも勝れ殊に又美男の聞にある者なれば環てお絲と人知れず割なき契りを結ぶ丈が實に匿れしより頗はるゝはなしとの故言宜なる哉早晩主個和太夫も兩個が不義を見覺りて藩邸氣質の一徹に大方ならず憤慨りつ自家の環瑾と同藩い外聞を憚り和三郎が不埒を嚴しく云ひ懲して直ちに勘當なしたる上又お絲には去氣なく永の暇間を遣はしッ、足輕平六を呼び寄せてそのまゝお絲を引遇與しぬ有左程に和三郎は自己が若氣の衍ちから父和太夫の勘氣を受け身の措き處なきまゝに八王子驛なる壓結職金藏と呼べる者の老母お虎は幼稚き時我を養育し乳母にて最と老實しき者なるにぞ渠に便りて左に右と其身の所懇を定め

んと獨り心中に卻きッゝ頓て那んの金藏が住居を訪ふに去年の臘月お虎は既に世を去しと聞くより遺憾に得堪ねど去とて復る事ならねば些少ながら香奠なる金藏夫婦に取せッゝ偖云々とお絲の情由より父に勘氣を受し事まで一伍一什を悉くうち語りて物語り只顧歎息する程に元來金藏夫婦等は輕薄無情の白徒ゆゑ今和三郎が零落て我此住居に訪問しを厭忌ころすれ喜悦ぬるの待遇に和三郎も夫婦が不實を若破りつ急き此家を立出しが幸ひ舍兄の悪聞にて貯はふ財貨もあるに因り所を繼盤として大坂の心齋橋なる茶器骨董店大文字屋喜右衛門は我母方の族婿ゆゑ渠を憑んで此上は身の落着を定めんと再回心中を決めッゝ前途急がれ道中に是より今熊高尾山或は甲州身延山と諸方の名所を見巡りつ其後愈に東海道の驛路に出て旅宿をば發夜累ねて漸やく一月住りの日數を得て那大坂なる心齋橋大喜のかたへぞ若きにける是より先にお絲ゝ又父平六に引取られて再回俺家へ戻り

しかも今さら何と岩間洩る清水ならねど陰暗き身の囚辞にうち歎きて獨り熟々和三郎が其身の上を案じ詫び母のお浪と妹のお君に左様とうち諾て流石に云ひも出し難ければ只羞らひて左に右と俺身を慎しみ居る程に此頃同僚某が父平六の許に來りて那和三郎が事をしも何くれとなく物語る談話の中に和三郎へ其後父の勘氣を受け八王子驛の堅結職金藏とか云ふ者の方へ便りて當分其身をば落着け給ふと洩れ聞くにぞ悲しい當家に止まりて父母に歎きを懸んより寧ろ那地へ赴きて御側に仕へ朝夕の御不自由を思めなば身妾が爲に此日頃雜儀を做給ふ憤怒も切て少しへ湧らず道理と心中に思ひ起しゝかば是より日毎夫となく鎖に旅の準備を整へ或日父母さへ親戚の某方へ赴きて歸りの遅きを知るものから妹が君が留守宅へ殘りて左に右此身の容子を戍りて側を放れぬより渠をば小田原驛内の或商店まで買物に假托けて出し遣りたる後頓て一通の遺書を父母の名宛に長々と書き認め

なぞする中にか君も歸り來りしが其日も暮て既に早や點燈し頃になりしにぞ時刻は好しと妹が今しも頃へ赴きし隙を幸ひ裏口より立出て日暮の往來に紛れて藩邸の通用門を脱て風さへ最と寒き二月の空の星明りに何處と道も定めなき小田原驛を脇に見て此夜は但ある一村落の旅店を訪ふて夜を明しつ其翌朝村耀能を屆ふて二夜の旅宿を累ね稍三日目に八王子の驛に到りつ此土地の豪屋五兵衛と呼れたる旅店の許に着ければお糸は是より云々と那金藏がうの上を問ふに主個は老實しく渠が住居を教にしにぞ頓て當家に一泊なし漸やく必中に安堵しぬ

第二章　青柳の泥に枝垂る汐干かな

武藏國多摩郡八王子驛は後面に小佛の嶺道を脊負ひ前面に玉川の清流を抱きて山力ながら絹帛の月毎市買の日も立たる甲府通行の街道にて最と繁榮の土地なりしが茲に同所の寺院を左方へ曲る家並に金と云ふ字を丸の中に雙鉤字で認せし箔頭店の表面

の障子を徐々と引明け其方へ入り來る藩邸風の一婦の小娘が小腰を屈め偖云ふやう「失禮ながら金藏さんの御宅は此方で御座いか」と問れて主婦の金藏い今しも客の手透にて坐傍への火盤にうち跨り煙草喫らせ居たりしが斯と聞くより少姐の顏を最と熟かし氣にさし覗き「ハイ金藏い吾儕だかシテ貴娘さんい何處から尋ねて此處へ來なすッたと云ふに小姐は恥かしさと又嬉しさに顏赧らめ「卑妾事は小田原のお糸とヤす者なれど此方に園部和太夫さまの御次男同苗和三郎さまが勝出遊バすと聞て風間の有ッた故女子の身にて遥々と遠い山舍の間迄も厭い尋ねて參ッたと深い仔細のある事偖ゆゑ情願園部の和三さまにお逢ひなすッて下さいなしと依頼むを潔れ聞く當家の女房お佐代は奥より走り出で所夫と顏を見合せつ何歟心中に頷きけん俄然に作る輕薄の笑ひと俱に此方に對ひ「夫なら毎常若旦那が御風間の出た小田原のお糸さんとは貴娘の事ぞ聞に含るは初めてなれど實い奈何樣

に陰ながら御案じ申して居ましたのに能くマア御出になりましたサア〳〵此方へ〳〵とお佐代が待遇す案内に率れお糸は兩脚の塵垢なぞうち拂ひつゝ奥の方へ通るを主個の金藏い此方に居たる長火盤の邊りに座を占め茶を勧め菓子を薦めてお糸に對ひ「雅殺營業の吾儕ゆゑお糸さんとは毫知らず意外だ無禮を做やしたが今お尋ねの若旦那の事に就ては御話を申すも奈何やらお氣の毒に思へど今さら貴娘さんに匿し課せもされぬゆゑ難駭せず と一通り吾儕が話す事情をお聽なせにと云ひながら故意と歎息くなしゝ休に首を垂つゝ手を拱き那若旦那和三郎さまには此月上旬かた自宅の老婆が去年の臘月死去だと知らずお出になり偖斯樣〳〵と貴娘さんと出來た由情から親且那の掛當受て路頭に迷へば常分此家の厄介に置いて呉とのお悪みに老婆は居られぬ吾儕が爲にも謂ば御主人同樣な若且那ゆゑ此狹い自宅へ寢泊りさせ申すも御窮屈だと直い近所の座敷を借てお居を別に做たの

が却って過失夫から悪い朋友が殖て博奕と女郎買の遊興に實が入り最初とは打って變った放埒に些っとや少っと貯へてお出の財貨さへ悉皆散財して錢一文にも御困りの樣子を見難て御異見を申せど釘に釘とやら曲った心中へ改まらず果へ詐偽物奕とかの危い事に連累され昨日江戸まで證迹になると聽くより直さま取締方に紹介を廻して歎願を致した所が二百兩の財貨さへあれば内濟で免して遣ると手先の衆が内々吾儕へ云れたれど二百は借置き一文の錢鈔も容易に貸人のない吾儕の身分で此上は幾程心配做たとても最早や適はぬ金力ゆゑお救助まうす手術も竭き奈何したものと今も今お佐代と兩個商量を做て居やしたと言ひ晴めし主個の言葉に愕然とお糸は暫し涙にくれ泣き沈みしが眼を拭ひ再回夫婦にうち對ひ初めて聞た和三さまの御身に係る災難から二百兩の大金がなければお救助まうす事も出來ぬと只今仰しやったれど成らう事なら身妾が身を遊女に賣って二百

兩の財貨を調へ和三さまが連累と歎の御難儀をお救助まうして下さいましと述るをうち聽く女房お佐代は先刻よりお糸の容貌を見やりて莞爾とうち笑ひ「ホンニ貴娘が若く界に身を賣っても圍部の若旦那をお救助なさる御了簡と聞いて安心做たものゝ金さん時刻が後れては折角和郎が是までに纏めた手術も違ふゆゑ少しも早く此御娘をば通し駕籠で吉原へお連まうして財貨に換に那若旦那を救助った上御禮の書簡は且那から御届け申すで拘座いませうサアお糸さん御支度が能ければ豊飯でも召上って駕籠は隣家の書さんと與四郎さんが相棒なれば身妾は暫度兩個の書を呼びに行って來る程に金さん和郎も支度をして待ってお出と金藏が顏を見やりつ戸外の方へ進出立って出行きしが忽ち兩個の與夫を此家の前に連來りて卒と割りに金藏とお糸に音途を急がするに金藏は又圖らずもお糸が夫婦の奸策に陷り其身を賣らんと云ひ出しより近頃左に右襄の目に見放されしも福德の三年

目ありとうち歎び頓てお糸を勵りて褥に載せつゝ興夫等と倶に急ぎて玉川の渡船を渡り日野原を越して府中の宿に出で既に此夜の亥の刻過ぎ那金藏が此年來知己る女衒の善吉が淺草田町の其住宅にお糸を乘し一挺の駕と均く着きたりけり有左ば復八王子驛の金藏は女衒善吉と倶に吉原江戸町二丁目の妓樓佐野槌か滯方へお糸を連立ち起きて偖此如々と身賣の事を申し入るゝに其標致も元來稀れなるお糸なれバ忽ち目見得も濟んだ上五年の年季で三百兩と茲に相場の極りしより即ち女衒の善吉が判人となり證文を書き認めつ那んの金を其坐に金藏受取てお糸に別れを告げたる後再回田町の善吉方へ戻りて酒肴を吩咐つ善吉夫婦と刺に坐し獻つ酬へつ酒盞を互ひに取換に飲干しながら那金藏は夫婦に對ひ「吾儕も今では八王子の自宅へ戻りて那土地の髮結同業で金藏と些ッとは衆人にも知られたが仮より好な賭博に折角出來た得意先も貪過失ッて寺町の身下な所へ引移り和

女が江戸で知ッて居る深川生れの那お佐代が廻り〳〵ッて八王子の吉傳と云ふ繻貫の旦那の世話に成ッて居たを類い友とお佐代も亦愛妾さまで絹布に纏まりながら贅澤を云ッて居らるゝ其身分で吾儕が旦那の髮結に往ッた處から好通を做たのが知れて出入を止められ僅か五十の坊金でお佐代を女房に貰ッてから去年の臘月に老婆も死去でいよ〳〵間が悪いと思ッて居るうち二三日前今日佐野槌へ身を賣ッた那別品が簡樣々の事情で自宅まで尋ねて來たを悪い事には脱落のねにお佐代が胸裏の寸尺で欺偽して吉原へ連て來ても和郎が居ねにと斯う早く金に換にるは浮雲い掙了と遊べ終りッ、懷中の財布取出し佐野槌で今受取ッた三百兩の財貨の中より三十兩を數へて善吉夫婦の前に置くを此方の善吉は受納めッ、金藏に對ひて禮を述終り「兄貴が思はぬ金儲けに自己まで顔が暖たまり又一資本出來たのでナヽト是から自己と一緒に出懸て見る氣はあるめいかと云ひ促すを

金藏も元來好な賭博に資本の金さへ充分に時へ居れば二言とな
く直ちに其意に從ひつ頓て主個の善吉と俱に當家を立出て是よ
り淺草馬道の佐太郎とか呼ぶ妻彦道家の方に到りつ同類の者を
集めて盈蓆をやをら敷ッゝ坐を占て偶よ奇よと銀張の博奕に忽
ち金藏はお糸を賣ッて受取りし二百餘圓の其金も半ばは取られ
て今さらに先非を悔めど詮方なければ其儘女衒の善吉に別れを
告げて八王子より獨人足に雇ひ來し那奥四郎等と俱に道中
を急ぎて寺町の自己が住宅に戻りし上偖云々とか佐代には這回
江戸にて賭奕に負たる事はかし隱して是まで語り方に素狀惡き借
財なんど償ひつ其餘は日毎飲食に費り散して或時は夫婦俱倡小
博奕の席に列なり忽ちに那んの金は遣りなく皆悉失なひて又以
前の容姿に早くも成たるは最と淺間しき事ども成り玆にお糸は
先頃惰夫図部和三郎が其身の勝負を救助んと金藏夫婦に頼かれ
て直ちに吉原江戸町の妓樓佐野槌お清方の抱に遊女となりしよ

り名も艶柳と改めて此年彌生の末出しに廓内に開く櫻花と俱に
其名を傳へしかば通客粹夫は過先に那艶柳をうち招きて俺ところ
巢の狎客なれと日毎夜毎に通ひ來る客さへ最と多きに因り未だ
一月過ざるうち此廓内に隱れなき全盛大方あらざりしが此頃
七軒の近半から展んの艶柳の許へ通へるうの遊客は年紀四十
二三には人品高尚き武士なれど毎常當家に來る毎に藝妓は元來
揚間の宇治貴美太夫と菅序作の兩個を殊さら最負にあし必ず
呼びて遊興しかど深くも喝まぬ其酒に今日は一層酔をまし早や
うの席に堪へざりけん藝妓揚間に侍かれつ佐野槌方へ赴さしが
那艶柳に手を引れて本間の内にぞ入りにける

第三章　見たきもの花紅葉より接木かな

東叡山い北の方根岸の里の片遠りに圓木の柴茅葺の簷風雅を表
面の別莊にうの掲標牌も五雀庵雨村と記しゝ門口より宇治貴美
太夫と菅野序作がゑへゝと一聲咳一咳を暗號に徐々てり來りて

家内を乞つ一室の内へ通るを今しも當家の主個雨村は寢床を起出なから雨個の者をうち見やり「コレハ序作も貴美太夫も何と思ッて朝の間から大層早く出かけて來たシテ艶柳は其以來奈何して居ると問ひ懸る言葉の終に着き貴美太夫は序作と均しく顏見合せ「イヤ若し旦那其事で實は内々花魁に昨宵か日に懸ッた時今宵は是非貴郎をバお連まうして來て呉れと依頼れた故取敢ず兩個が罷り出たものゝ今お眼覺の模樣ではとても急いでお出で向のないのは知れて居る事なれバ寧ろ是から山谷堀の紫玉を訪問れ善四郎（料理家八百善）へ供をするとは奈何でゲスと云ひ促し丶其言葉に元此雨村は本性を白子達四郎と名乘たる他川家の旗下にて祿千石を賜ひぬる門閥正しき者なれど其性質最も病身に て登城の出勤もなり難けれバ即ち家督を其舍弟達次郎に相續させ月々多くの賄料を受て是なる根岸の里に別邸を造り俺好嗜む俳諧なんどに遊びッ丶其身を自恣に消光しゝかど此程國らす甲

乙の朋友に誘引れ廓内の櫻花を觀んと仲の町の近半と云ふ引手茶屋に赴き其夜艶柳を敬妓に招しが初めにて其後屢々集の許へ通へどさらに帶紐を解きて熟々待遇たる樣子はなけれど怨みもせで倚左に右と通ひ詰め紋日の仕舞は云ふもさらなり積夜具襦襦の費用まで何時も俺からさし出すにぞ番頭新造の若浪も雨村が斯る計ひを最と感じて艶柳がうの待遇のうち解けぬを注意ッゝ既に昨宵那貴美太夫と序作に依頼み今日しも迎へに出しゝなれバ元來遊興の散出に厭目を着ぬ雨村ゆゑ先貴美太夫と序作を暫時待せて下紐に手水を汲せ嗽ひを遣ひ頓て衣服を改めつ其座へ再回出來り「夫なら兩個が云ふ通り是から堀の紫玉をば誘引ッて山谷へ出かけた後恰好時刻も宜しに廓内まで行らと脇差を手に取扱て腰にさす後に續いて貴美太夫と序作も均しく當家を立出で坂本通りの横道より大音寺前の往還を原て山谷の橋際なる寒富士紫玉の其住居を雨村を祝め雨個の者が訪ふに紫玉は先

刻より或通客の酒席をば果して歸りし折なれば今此雨村が訪問れしをうち歎びて先り出で「是は根岸の雨村先生能くぞ此なる白屋へ御出ありしい不思議なれと最とうち感慨て挨拶をなしッ、傍へを見返りて傍側去らずのぬし逢がか出の上へ何やらん變ッた遊興の御趣向がある事だらうと思ッた故是から直ぐに僧(是は紫玉の自稱なり)も同伴をば致しやせうと云ふに雨村は紫玉に對し「貴は兩個に誘引れて今善四郎へ往く序で誘引ッた後へ奈何なるか其所等は僧察し給へ」と答ふる言葉に三個も均しく後に列なりて山谷を投てぞ起きける割烹と云へば八百善と現今も山谷に名の高い當家の奥間に白子の隱居雨村を初め幇間の紫玉と序作貴美太夫の四個均しく會席に坐を占め中酒の獻酬に疾や渾酔となりしかば紫玉は殊さら身を進めて雨村の方をうち見やり「トキニ旦那善四郎の此梅盛の塩梅い毎常ながら妙でゴスが最う御僧は空腹へ充分飲酒めした故是から徐々夕飯を頂戴き女郎

衆は古い〳〵と饒舌たてッ、喜美太夫と序作の方にうち對ひ女郎衆と云へば旦那には此頃廓内の鮑柳さんの所へ繁々お通ひになると一昨日近年のお鉄が暫度御僧へ告た所から今日あたりは根岸の隱居へ伺はうと思ッて居た折ぬし逢の御誘引うけて此家へ供定めし今宵は近年へ出に成ッて花魁の可愛いか顔を御覧なさるも亦格別の愉快ずち卒々越あるべしと促し立つるを雨村は見て故意と落着き笑ひ「紫玉足下は老人甲斐なく那鮑柳の事なんぞを鐵に聞いて左や右と己が惚れて居るやうに思ふか知らねど其實は是なる序作も喜美太夫も大概察して居る通り色情で通ふ情山ではなく些ッと此方に思ひ込んだ事がある故竟に一度未だ帶紐さへ解しもせず强ざら野暮も云はないで是まで遊興通したので今宵も到底嫌忌れに行く積りだと三個の顔を見やりて此家の下婢に割烹の價直を取らせッ、頓て此日も暮果て燈點し頃になりしかば紫玉を初め貴美太夫序作を連て田

中を、脱け直ちに廊内の近半へ到れば此家の女房が今しも雨村の店先に來るを見るより立出て「旦那さまには先程から那花魁がお待遠で若浪さんも亦何なにかお案じ申してお出なされバサアサア御上り遊ばせと席を前めて遠りを見廻し「オヤ紫玉さん和僧も今日雨傾の衆と御一緒に旦那のお宅へお出のかと問へば紫玉は老實になり「イヤ僧は廻遠しの此天眼で旦那が今此家へ御出と知ッた故大門口でお待受をいたしてお供を做たのでゴスと述るを聽いて女房が可笑相へて吹出し「紫玉さんの天眼では無能く物が中りませうネンニ其事那お疎が昨夜河岸の香以さんに言傳ッて居た紙包み何だか當て御覽なとお欲に言ッ嘴け取寄するを紫玉は手に取り封かし切り「コレハ旦那に書贄を乞ふ積りて河岸の香以さんが此僧まで依頼の書物ナント必然あたッたらうとつぶやきながら二階の階子をのぼりて序作、貴美太夫とともに賦つ餘興を添へ待つ間程なく艷柳は番頭新造の若浪と丁衆を連て徐

々と此近半へ入來り今しも雨村が對間と藝妓を集へて酒宴を催す折から左側に坐を占めて莞爾笑ひ合釋をするを雨村は見やり柔順に「花魁今日は喜美太夫と序作の兩個を根岸まで態々迎ひに遣した故何か用でもある事かと問いたら已が此二三日廓内へ來ないを氣を揉んで迎ひに來たと兩個が言葉に先づ安心は做たものゝ日のある中に此廓内へ來るも奈何と山谷堀の紫玉を誘引善四郎で今迄遊んで來た所と述るを坐傍の喜美太夫と序作の兩個は倶に螢を列ねて「モシ花魁旦那を漸ッと根岸からお連まうして來やしたと云ふのは虚言で其實は是なる堀の僧が浮雲く旦那を誘引かして何處へか往かうと做た所を吾傳兩個が故障ッて北廓へ供を做て來た故花魁澤山御褒美をと云ふの言葉も聞あへず紫玉は新造の若浪に對ひて「イヤ若し若浪さん喜美と序作へ御僧にも濟度の出來ぬ悪人なれば滅多に兩個の口に乘ッて其實にされては大迷惑と上坐の方をうち見やりて頭上を撫れば若

浪が「イヤ紫玉さん和僧ハマア能く彦さん（當時北廓にて假令身拭ある者たりとも一字名をもて呼び做すを押客の通例とす即ち彦は雨村の通稱なり）誘引して何處へか行うとかしたとか花魁に出なましと苑國突へば彦四郎の雨村は今しも手に受し猪口を飲み干し紫玉にさし「僧足下は自己の所へ餘まり無沙汰を做たせにて喜美と序作に思弄れても今宵は腹も云まいと云ふを序作と喜美太夫の兩個も等しく言葉を添へ「是は旦那の仰しやッた通り流石の御僧でも餘もや返答ハ出來ヤスめにと勸ット笑ふを若浪が那飽柳と俱僧に雨村の手を取り坐を立せて最う彦さんも先刻から大層お酔ひなんしたゆゑ些ッと本樓へ行かしッてお睡眠なましと勸むるを雨村も最早や宜き頃と思へバ此坐を切り上げて是より紫玉喜美太夫序作其他の藝妓をば引連れ再同江戸町の佐野樓へぞ急きける是より先に飽柳ハ言て性命も惜まじと契りし門部和三郎が身に振かゝる災難と聞くより金藏夫婦の者

に詐欺かれたる奸策ぞと神ならぬ身の毫知られバ既に此身を佐野槻の妓樓に沾て三百兩の財貨を調へ金藏に遁與せど其後和三郎は厭い便りの一筆さへ未だ文音のなきものから金藏夫婦が左に右と宜きに計らひ呉れたりと思へば些少安堵なゝ憂き河竹の其中にも再同情夫和三郎に含ふを心中の快樂と客の機嫌を取るに消光せど元來和三郎い外に肌身を許さじと招ひし言葉のあるに因り面付を初め其他に微令奈何なる遊客の來れどさらに帶紐を解きし事さへなかりしかバ北廓通ひの通客等は俺こそ盡婦を鼻かせんと倚競ひッ、飽柳を迎ふる者の多かるより順て北に類ぬなき男子嫌忌の花魁といよ〳〵其名を轟かしぬ有左ば復金藏は先頃か糸を非き欺きて其手も濡さず三百兩の財貨をば見る〳〵掠奪れど元來惡錢身に着ぬ比喩の如く忽ちに遁ひ尽して又以前の姿容となりし所から女房お佐代と商量して再同お糸の飽柳が許に來りて面會を做さんと乞ふに沾主の金藏なれば佐野

槌の櫻主にても拒まんやうなく貴に礼廻艶柳の部屋に通して紹介すに金藏は又那お糸が斯る全盛の花魁となりしを太く驚けど今さら渠婦を詐欺くには機會ところ宜けれと小膝を進め娘の厚い御心中から那若旦那の和三さまも二百兩のろの財貨で護送にならうと做た所を首尾よく御救助ようした上自己の宅まで引取ッたが纖弱い身体の旦那ゆゑ二三日紀明なすッたので遂々病褥を引起し粥湯も通らぬ大病に迚も平癒へ做なからうと八王子驛で名醫と云ふ玄人さんの診斷なれど近來癇癪ッた和圖陀の何と か稱ふる藥材をば飲用て見たら若し萬一助命る時もあるだらうと云はれたけれど貴娘も能く知ッてふ出の自己が身代奈何する事も出來ないので調ば見す〳〵若旦那を見殺しにする情由なれば折角貴娘が身を沽ッてお救助なすつた若旦那情願此上五十兩の都合を自己に做て下さると夫で以前の藥材を求め奈何か性命のあるものならお助命まうして上げたいと眞實しやかに云ひ欺

むき悄然として見にたるを那艶柳は斯くと聞きうち驚きつ身を進め「夫なら此頃和三さまには御大病にうち臥してお出遊ばす事なる歟左樣とは知らず今日が日までお恨み申して居りましたを思へば今さら勿体ない財貨で助かる御性命なら身妾が奈何でも調達て上げれば俯願御看病を身妾に代ッて做て揚て下さいまし と雨眼に浮むる涙をうち拭ひつ頓て新造若浪にも此等の情由を細、語き告げ頓て坐傍の笠い理より豫て雨村が小遣にと際奥かさたる五十兩の財貨を取出し金藏に遞與して呉々和三郎の上をば依頼み若浪と俱に別れを告げゝるに金藏は又女房のお佐代と既に課りし如く那んの財貨を騙詐しにぞ造化精妙と咳きッゝ此佐野槌を駈出て直ちに八王子へ立戻りぬ

第四章　春雨の今日ばかりとて降にけり

天保の昔時酒井汝の落胤と稱されたる雨華庵抱一上人が初音の里に世を避けて日夜北廓に往復つ勤問なぞ最と愛て其身を自恣

に送られし例しならねど白子の巴屋雨村は其後艶柳の許へ屢通ひしかど元來婦女に溺るべき氣質ならねば艶柳が此程左に右うち鬱憂て待ち過さへも最と悪きを憤怒りもせず今宵又毎常の如く入來りて生敷の酒宴を果しゝ後疾や子刻過きの屏風の裡雨村は其處に泣き伏したる那艶柳を勵はりて「毎常に憂ッた花魁が今宵の悲歎は奈何した事若しからずはうち諦て自己に情山をお話しだと及ばずながら相談もあらうと徐かに問ひ慰れを艶柳は又虚を遮め「不思議な御繰で此日頃御待過をもせぬ身妾を怠女のやうに可愛がッて下さる計りか何くれと身妾の身体に關係ッた費用い何時も貴郎から出して貰へば斯う遊ッて男子嫌忌と名を立られ今日まで暮して居るものゝ貴郎の厚い御親切に甘へて先頃ろれとなくお話しまうして置きました身妾の情山ある某が此頃重い病氣に臥し危ふい性命と聞く折から今日八王子の金藏より屆いた文通に所夫とも思ふ情夫はさま〳〵に手當をしたれど定業

やら身妾が此樓へ身を沽ッて苦界の勤めをする甲斐なく昨日病死をなされたと紙最う此上い慈しいに生きて憂き目を見やうより寧ろ死なうと覺悟をば極めた身妾の心中を情願察して下さいましと北廓訛言さへ未だ移らぬ小姐氣質の艶柳が尚云云と和三郎の上は元來金藏夫婦の事まで總てうち諦し一伍一什を物語る雨村はほと〳〵氣の毒に思へば輒て艶柳に再回對ひて偖云ふやう「死なうとまでに思ひ詰た心中を入れ換に死去ッた情夫の爲に苦提をば弔ッて遣る了簡なら翌日とも云はず今宵の中吾儕が此樓を賜身して根岸の宅へ連て行けど知ッての通り妻子もなければ此後息女同樣に可愛がッてやる程にナント吾儕が此依頼を花魁聞いては呉まいかと諫め賜せば今さらに又艶柳も此日頃親も及ばぬ親切に自己を思ふ雨村が言葉に流石固辞むに固辞まれねば死する性命を存命て左に右雨村に身賜をされ一回根岸の別荘へ赴さし上思案もあらんと漸やく心中を決めしよりやをら形

ちを改めて言葉を正し雨村に對し「卑しい此身をうれ程まで思ッて下さる御心と知ッて今さら斯うまうすも奈何やら氣僞のやうなれど情願卑妾を購身してお連なさッて下いましと答ふる言葉を聞き敢ず雨村は太くうち歡び「和女が吾儕の詠めを聞、容れ購身をさせてお呉なら是から直ぐに若浪にも話して樓主へ近半から悪合せて今宵の中坐敷を引せ翌日の朝根岸へ連て行く積りだと偖新造の若浪と艶柳雨村の三個が商量しッゝ近半より竟に購身を云ひ出し後八百兩の大金にて相談整ひ其翌朝頓て那んの艶柳は若浪初め傍輩の花魁衆にも別れを告げ雨村が惜れに耽間藝妓の送りも華美しく竟に北廓を立出て此吉原より程近き根岸の住居に赴けるとて雨村へ是より後北廓通ひも止まりて只管茶事と俳諧の席に遊びつ艶柳をば即ち以前のお糸と呼び息女の如く勤へりて早くも一月を送る程に谷中あたりの中空より時鳥さへ啼き出づる四月の下旬となりしかど雨村は此頃痛風にて些少身

体の痛きに因り豫て本邸の出入醫者某を呼び診察を乞しに熱海の温泉に行き給ふこと適當なれと只管懇願たりけるにそ白子雨村も此年來未だ熱海に赴きし事さへなければ機會好しと頓て紫玉と貴美太夫序作の三個とお糸を引連れ保姆がてらの旅立ちに五挺の駕籠を打ち列ねて其日は神奈川驛の蠣石崎方へ止宿しに此家の主個は桃郷と其俳號を呼做して當時江戸にも知られたる正風俳家の者なれば雨村も渠とは先年より其名を聞て聞知るに ど即ち主個桃郷にも名乗て懇意を結びしかば偖俳諧の雑談に時を過ぐしつ酒食を果し既に睡眠に着きたる後翌日の朝に當家を立出で是より再回通し駕籠にて尚其途中に一泊を做して熱海の湯治場なる今日に来が許まで等しく着きにけり雨村は初めて熱海の地を見るに殊さら珍らしく先づ旅店に一室を設けお糸は先來貴美太夫序作紫玉の對間等とゝもに酒席をうち開きて只管心中を思さむるに紫玉は其坐を辿み出で戸外の方をうち見やり「ナ

ント此家から海面を斯う見渡した趣きは桃源屈とも云ひさうな景色でゴスと手に受たる猪口を飲み干し兩村にさし「所で旦那御僧が只今一句出ヤシタと云ひッ、頓て鼻紙に何やら認めさし出すを雨村ハ受取り讀下して「眼に若葉緑海の空や時鳥」成ほど是ハ僧だけ初松魚の句を綠海の空に詠み替へたのは流石御功德夫に左樣と喜美太夫と序作ハ浴室へ行ッた切り未だ戻らぬは湯氣にでも大概上て居るだらうと風話をすれバ影とやら兩個はお糸と倶伯に一室の中へ立歸り喜美は序作を見返りて「奈何にも旦那の風話をば成すッた通り此序作が湯氣に上ッた其せにで實は大きに暇どれヤシタと云ふ序作は聞あへず「イヤ若し夫は大違い喜美が例の助僧から此家の女中のか喜代さんに氣のある所から謀れを垂らし巫山戯て居るを漸ヤッと召連れ參ッていなりと最うち戯て物語るを紫玉は雨村と顏見合せ頷の遽りを碪と打ち「浴室で出來た角口ゆゑコイッア如何でも水にする方が互ひに宜

うゴスと云へば序作と喜美太夫の兩個も等しくうち笑ひ果は各自持藝に興を添へッ、此日も暮れ其後此家に四五日を過すに一日大坂の大喜と云へる茶器骨董商が商用の爲江戸表へ下りし應中橋の大善とか云ふ同商の招待を受け其供に連たる主管い和三郎伺其他に三四個の者を誘引ひ今泉の許に止宿て雨村等と等しく湯治をなしたれど元來集會も金銀に乏しからざる好事營業の官蓋家なれバ新橋に當時有名の町藝妓六金、三勝なんど呼ぶ兩妓を引連れ來しなれば朝より酒席をうち開きて一中節の自然居士園八節の梅川と俗を放れし一謠節に或は謠ひ謠はせつ那首の二階の小坐敷に遊び暮すをお糸は又當の下浴室へ赴きて湯治を果し浴衣の儘徐々此方へ立戻る折から噪む園八の此所等に聞ゆる一謠節に暫時佇立み聽惚れつ奈何なる者の遊興ぞと那首の二階をさしのぞくに道は抑も如何に其一坐の中に列なる一個の男子は頭結金藏が死せしと知らしゝ和三郎に紛ふ方ふき者なれバ

若しや他人の虚似かと瞳子を定めうち見やるに那方も不審と思ひけん忽ち欄干に立出てお糸と顔を見合せしがうち窺さたる形狀にお糸は直ちに駈行きて物云ひ寄らんと做したれど流石雨村が手前を羞ぢ其儘此所を退きて以前の一室に立戻りぬ

第五章

聚散離合は世の中の尋常とし云へど環て又死せしと思ふ和三郎を問らず當家に見悪しより宛然夢に夢見し如く嬉しさ大方ならされど去とて那もの和三郎に逢ひもされねば其儘に遺憾くも見過して雨村が坐敷へ戻りしかど左に右情夫和三郎が上のみ心中に思はれて最と浮立し挙動を雨村ハ左様と知らざるにぞ偖は温泉の効顯にてお糸も些少結ほれし心中の憂さを拂ひしかとうち歡びつ喜美太夫紫玉序作の四幅を傾相手になしさま〳〵に遊び暮して同宿の二階に止まる大善等の一生のあとも想意になり等しく海路を取設けて互ひに呼つ迎へつして交誼をさへ結ぶ程に

雨村ハ元來茶道にも勝れし上に遊藝も殊さら喧ハば六〻と又三勝の三味線にいよ〳〵興を添へなどする折から那んの大善は由村に對ひ穏過るやう「不思議な御縁で御想意を結んだ上はモシ且那此紀海から直い其所の網代へ一夜泊り悪に行うと思へば堅口の朝此大坂の大喜さんと貴郎も奈何か御一所に御出を願ふと云ひ出すを紫玉其他の都間等は聲を揃へて「モシ且那是は吾嬢三個が歎願いたせば大坂の且那を是非誘出向をと依頼を雨村も受諾て「吾倆も何處へか出悪やうと思ッて居た折御誘引を受たが幸ひ大喜さんと御同道をバ致しませうと頓て一生の約束も極れば即ち其翌朝雨村を初め大善等も俱に小早く起出て主個に云々頃は りつ立出んとする程に大喜の主管和三郎とお糸の兩個は此折から俄然に心地悪しとてうち臥しゝかと今さらに遊約もならねバ其儘に雨村を餘なく留守の家に殘して六金、三勝と紫玉其他の都間を引連海路の險路を通し都能にて徐々と網代の駅に着に

ける絵海の旅宿の留守の室にはお糸と那んの和三郎が言ひ合されど自ずから同じ思ひにうち沈みて故意と病氣に假托けつ此日の外出を免かれしが樣會ころ好けれと和三郎は自己が一室を立出てお糸の方へ入り來り聲を沿めて偖云やう「和女は確實に小田原のお糸と此程二階から見た折疾くに察したけれど吾儕も迚の手前と云ひ將可言葉も慰られねば奈何した情由と思ッて居る型日幸ひ此坐敷の雨村さんと恐意になり其後度々大善と俱に來ッて和女に會ひろれとはなしに內々で樣子を探るに雨村さんの今では愛妾と見うけたゆゑ故意と默ッて居たけれど一度は和女に為ゝ會ひ情由を聞うと今日朝代へ行くのを止めて病氣に託けて獨り殘ッて居た所和女も幸ひ病氣と聞き此處へ忍んで來たものゝ一体先頃親爺から勘當うけて別れた後奈何云ふ情由で雨村さんの愛妾に成ッてお出のか切て吾儕の斷念る心中癒せに一通りくれなと最と恨めしげに問ひ慰るをお糸も今さ語して聞せてお呉れなと默ッて居たゆゑ故意と病氣に假托けつ此日出てお糸の方へ入り來り聲を沿めて偖云やう「和女は確實に小田原のお糸と此程二階から見た折疾くに察したけれど吾儕も迚の手前と云ひ將可言葉も慰られねば奈何した情由と思ッて居る型日幸ひ此坐敷の雨村さんと恐意になり其後度々大善と俱に來ッて和女に會ひろれとはなしに內々で樣子を探るに雨村さんの今では愛妾と見うけたゆゑ故意と默ッて居たけれど一度は和女に為ゝ會ひ情由を聞うと今日朝代へ行くのを止めて病氣に託けて獨り殘ッて居た所和女も幸ひ病氣と聞き此處へ忍んで來たものゝ一体先頃親爺から勘當うけて別れた後奈何云ふ情由で雨村さんの愛妾に成ッてお出のか切て吾儕の斷念る心中癒せに一通りくれなと最と恨めしげに問ひ慰るをお糸も今さ

ら遮しさと双恨めしさにさし迫る涙をやをらかし拭ひ「シテ貴郎には八王子で此回御病死遊ばしたと金藏どのゝ報知にて卑妾も死なうと做た所を是なる白子の旦那さまが親も及ばぬ親切から止めなすッた其上で今回熱海の湯治場へ一緒に參ッた其理由の始めを云へば偖樣々々終りを云へば此如々々と是より八王子表まで那和三郎の踪跡を尋ひ尋ね行きたる其後に金藏夫婦が奸計より竟に此身を苦界に沈め即ち雨村に購身をパせられし事を悉く物語りしに和三郎はうち驚きつ後悔なし「夫なら和女ハ吾儕の爲と金藏夫婦に詐欺かれ其身を苦界に沈めしか偖も惡きは八王子の金藏夫婦が上なりと切齒をなして憤怒れど去とて程經し事なれバ早や詮方もあらざるより再回お糸にうち對ひ「左樣とは知らず那樣まで堅い夫婦の約束を做たれど親父に勘當を受けた處から零落れた吾儕の心中に愛相が尽き立派な且那の雨村さんに其身を任せてお出のは如何に所惡ない世の中でも餘まり不

雷な和女の心中と雷は是まで恨んで居た吾儕が今さら面目ないと云ひつゝ、頓て身を逃め吾儕も其後は八王子のお虎に會ッて左に右くと身の落着を決めんと尋ねて行つた甲斐もなくお虎は一昨年病去ッて金藏夫婦は生質の善くない者と知ッたゆゑ二三日止宿ッてゐれから後おもひ出した大坂の大喜と呼べる茶器骨董商は現在吾儕が娘婿で可成な身柄の者なりと豫て聞いて居れば直ぐに那地へ出向いた上今では同家の主管となり一年餘りを過ぐすうち元來好に茶器骨董の鑑定さへも覺にしより今度主個が商用で江戸へ下ると聞くからに藩邸の安否と且は又和女は如何して居る事かと俱に下ッて尋れやうと思ふ間もなく大善の同業に誘引れ此熱海へ主個の從者で來た折から此處で逢ッた果て左に右くと倘身の上を語り出で流石に永き夏の日も早や西山に傾むく頃下婢の運べる夕飯に酒さへ添へて持來るを大善再は吳々も尽きぬ緣しと手を拒ぬき暫時歎息なしたるを糸は聞

村も早朝より網代へ遊山に赴きたるうの留守なれば雜れ一個憚かる者もなきに因り等しく酒食を果しゝ後竟に此夜は和三郎お糸の兩個も久々にて互ひに思ひ思へれし正なき夢の仇枕を此處に再回結びしが恁て兩個は北堅朝後の證跡と和三郎は年來相交の記念なりと肌身に貯はふ金無垢に春駒の堅を毛彫にせし一割の目貫をお糸が貯へふ一枚の楯と取交しつ最早大善、雨村等の歸宅に近きなりと思へば後の逢瀬を約し頓て和三郎は去氣なく自己が一宅へ戻りしかどお糸と果が情由ありと知る者絶にて無かりけり有左ば復大善、雨村の同行は六金、三勝、喜美太夫、紫三、京作の幇間等と等しく網代に赴きて那地の旅店に宿を投り網を引せつ魚漁をさせ北夜は例の三味線に諧ひ明して愉快を尽し堅日熱海へ立戻るに那和三郎も亦お糸も此時漸やく病癒さへ以前の如く疲りし体にて此方へ出迎ふを大善始め雨村等も兩個が快氣に及びしを太く歡び是より後再回酒席を開きなどし猶四五日を經

る程に大善其他の同行ハ俄然に所用の出來しとて江戸表より急飛脚の到來したるにうち驚き佑雨村等にも再會を約して云々別れを告げ頓て六金、三勝等を引連れ熱海を出立なし各自江戸にぞ着きにける雨村は大善、大喜等の歸りし後は左に右と遊興の朋友を失ひて熱海の旅宿も既に倦きしにぞ自己が痛風に悩みし身体も温泉の効驗に今や適しけん忘れし如く癒にしにぞ不日歸宅に及ばんと思へばお糸紫玉等にもろれ等の山を云ひ傳へて那んの準備を促すに此地は從來天城山に續ける豆州の海岸にて殆んど名木に富めるより板をもて製したる手匣或ひは食籠など旅宿の家毎を賣歩行きて營業とする者多けれバ今しも年紀十三四の此處等に稀なる一個の小姐が此今泉の奥坐敷雨村が住ふ一室の障子を徐と引明けさし覗き御用は奈何と呼はりぬ

第五章　雨に人たちもとほるや杜若

當下那んの小姐は閑らず雨村が一室の中を覗くに限て先年父母を振棄我家を脱走なしつゝ姉か糸が一個の武士の側に坐し居るを見るより訝かしく思へど言葉もかけられねバ故意と素知らぬ心地に旁を向きて行き過ぎんとなすを雨村は呼び止め「ア、若し小姐匣細工を購求てやれば遠慮なく近う〳〵と進むるに小姐はハイと挨拶さへ恐ず〳〵なして座敷に入り背負ひし包を引御し其座へ出す種々の小匣を見するに雨村は又紫玉其他の婦間等と等しく手に取り彼是とうち詠めッ、言葉をかけ「和女ハ年端も行ないのに重い包を背負ひ歩行き營業とするは雨親が頑つている居る情由か已も熱海へ來た序に望みの書籍匣を楠の割木で造らんと思へバ親父が壯健なら氣の毒ながら今此家へ來て呉まいかと誂らへれバ小姐は手を着き慇懃に會釋をなして雨村に對ひ「ハイ卑妾は此土地の者ではなけれど一昨年親父が主君の暇間となり餘義あい流浪の身の上から親子三個此地へ來て親父が覺ねた造物に熱海細工の小匣を製作左やら右やら凱利もせず消光し

て居るうち去年の春母は不圖した感冒で果敢なく此世を去つた後親父が貧に歩行ては宅で職業の出來ないゆゑ不束ながら身妻が斯う乗客の御部屋へ出て街道りまうしふ賜求を願ふも到底組父の爲と最と哀れげに物語るを傍へに聞き居る實の姉ふ糸は現在妹のお君に逢ひは逢ひながらうち明られぬ身の科を悔る計りか母上も去年果取なくなり給ふと知る悲歎を泣くにさへ泣れぬ義理の柵に迫き來る涙をおし止め故意と言葉を改めて「聞けば此娘は母親もなくて遠父の手助けに此重荷をば肩負ひ歩行孝行するとは爺父の身に取ッて如何に嬉しからうと傍へを向いて兩眼にかロリと輝すうの涙を早くも悟る白子雨村が那小姐とお糸の顔を熟々見競べ胸の裏に原來は妹と思へども白地に云はゝ兩個が羞る所もあるならんと再回小姐にうち對ひ「うなたが父への孝心に愛て是なる包をば自己が遣らず賜求てやればサア其代價を受取れよと坐傍の手匣に貯蓄し五兩の財貨を奏紙に包んで出す

を小姐は受取り「恐皆お賜求遊ばして下さいますハ有難けれど二分にも足りぬ此品を大枚五兩頂戴てハ自宅へ戻ッて爺父さんに叱られますゆゑ情願ッア御烏目をば頂戴せて下さいましと押戻し受取る形狀のあらざるを雨村はほと〳〵感心なし「イヤ何夫ハ餞への手金に遇與せば手細ハない默ッて自宅へ持歸り爺父を此家ちへつかはせよと强て小むすめに投與ふるにぞいはさら固辭も失禮とおもへバ頓て幾度となく禮をのべッゝかいとが力を返りなが ら我家をさし外面のかたへぞ出行きける暫時過ぎて年紀五十餘りの一個の老爺が傍への障子を徐と明け「モシ白子さまやらの御部屋は此方で御坐いますかと云ひッゝ頓て入り來る雨村はうれと察してや一室へ迎へ坐を前まし「先刻小姐に吩咐た足下は匣屋の老爺かと問へば老爺は慇懃に下げたる頭をうち擡げ「ハイ吾儕は仰せの通り匣屋の老爺で御坐いますが先刻小姐に御手附金大枚五圓を遇はされて御注問をバ遊ばした其書籍匣

は吾儕の痩せた腕では御氣に入るやうな細工も出來なせねバ御親切に折角と仰しやったれど係の人へ御注問を願ひまするシテ又小姐が差上た小匣の代價を賣て即ち銭が四兩一分と鳥目が二貫文御勘定なされた上御受取下さいましと者に懸けたる破れ紙布の口を引解き其の所へ出すを雨村は手も觸ず老親が拆る筥賣の狀を見るより感し入り「注問品は兎も角も小姐が足下の孝心に愛で取せた其五兩些少ながら吾儕の寸志マア請取ッて置くが宜い間けば足下も元來からの土地のものでもないさうだシテ其落郎は何處なるやと問ふに老父は數回雨村を拜し那んの金を再び紙にかし包み「左樣仰しやる此金を御返し申すも失禮ゆゑ夫なら暫時老父奴にお貸なすッて下さいましと受取めッ、又云ふやう元老僕は小匠原の足輕役を勤めました磯野平六と申す者で兩個の娘を持ッたれど姉は不孝の大罪から主君の二男と不義密通して脫走た後は風の便りも無かに孝行を尽して呉れがお仁慈の深い貴郎に御面會を致すも到底東海の他御用が濟まず御暇を最うする程に旦那さま隨分御樣宜しうと別れを告げて立んとするを雨村は再回呼び止め二十兩のうの金をば御貸與へて平六をそれとはなしに憐むを糸は孫て先刻より次の一室に身を潜め父が話しを聞傳へて流石親子の情合に其身の科をうち詫びつ面對せんとなしたるを雨村が眼をもて止むるにぞ其まゝ果が歸り行く後ろ姿容を見送りて密かに涙を濕し「雨村は此口書籍匣など他の商賈の店に誂らへ落成の上江戸表へ送るべきの約定をなしたる上お糸にも準備を急がせ頻て翌朝喜美太夫、紫玉、序作等の請問を引迎ッ、那今泉の旅店を立出て根岸の住居に戻りしは此年四月の下旬なりしが是よ

ッたに此頃は又其情夫を棄て立派な旦那樣の愛妾になッて居りますとか假令姿容は錦繡を着て榮曜を尽すも畜生の樣な心中と反對の妹は未だ年端は行かれど破れた衣類を身に纏ひ此老父奴に孝行を尽して呉れがお仁慈の深い貴郎に御面會を致すも到底東海の他御用が濟まず御暇を最うする程に旦那さま隨分御樣宜しうと別れを告げて立んとするを雨村は再回呼び止め二十兩のうの金をば御貸與へて平六をそれとはなしに憐むを糸は孫て先刻より次の一室に身を潜め父が話しを聞傳へて流石親子の情合に其身の科をうち詫びつ面對せんとなしたるを雨村が眼をもて止むるにぞ其まゝ果が歸り行く後ろ姿容を見送りて密かに涙を濕し「雨村は此口書籍匣など他の商賈の店に誂らへ落成の上江戸表へ送るべきの約定をなしたる上お糸にも準備を急がせ頻て翌朝喜美太夫、紫玉、序作等の請問を引迎ッ、那今泉の旅店を立出て根岸の住居に戻りしは此年四月の下旬なりしが是よ

り先に大善等は至急の所用に飛脚を得て各自歸宅に及びし後雨村が此頃歸宅をば儀しゝと聞くに一日の朝大善祝め和三郎も等しく根岸の住宅を訪問れ佐一別の挨拶に送みの口前のべ終れば大善は又大坂の大喜と俱に座を進め「トキニ先頃熱海にて御話し の出た不味公が秘藏なされし御茶器を實は拜見したい爲態々推參いたした故若しからずば拜見をと依頼むに雨村は謙遜り「イヤ何程の茶器にもあらざれど御望みならば左に御覽を願ふと云ふ程の茶器にはあらざれど御望みならば左に右と御覽に入れんと次の室に扣にしお糸を身近く呼び「和女が此頃風話をば毎日して居る新橋の大善さんが御出ゆゑ風爐の支度が出來たなら御案内をして呉なと云ふにお糸は和三郎が訪ひしと聞くより嬉しさに轟うく胸をおし汎めて徐々其坐へ出來り最善其他の賓客等を等しく案内なしにけり有左ば復大善等はお糸に連られ裏庭の茶席に至るに此座敷は元來主個が好みにて作り

設けし物數寄なれば結構云はん方もなく先正面の軸物には木庵和尚の古筆を掲げ床花其他の赴きも千家の流義に通ひたる作法に坐を定めて雨村に對ひ云々と家作の好事を褒めなさして那んの茶器を見終りつ頻りに賞しけるはさに雨村は渝茶の立前にうの一順をすましゝ後佐大善にうち對ひ「拙劣き茶事も得恐意い因みに一席催ほさんと思へば諸君も拙宅まで翌日正午に御出を願へまほしと云ひ述るに大善初め大喜等も太く歡び是より後陽き酒席の翌應に尚さまゝの雑談を語り暮して戻りし後約せし如く其翌日大善は又和三郎と大喜の外に此年來恐意を結ぶ小田原藩皆根作内を誘引て雨村が茶事に赴きしも此の日は大喜を主客の席に勧めて大善が其詩客い席に着きぬ雨村は猶て八百善に申し付たる會席の好み制京に膳器を撰み自から給仕の主個態に頓て酒飯も終りしかば濃茶の手前にサラ〳〵と茶筌を搔き立て屈紙を添へ其坐に出すを正客の大喜ハ菓子を食ひ果つ那んの

濃茶を手に取上げ作法の通り廻宜く飲み次席へ廻せば作内と和三郎も手順を得て其詰客の大善が今取受て飲み終りし茶碗の底に何やらん光れる金具の見にけるにぞ是はと粗相を詰かれぞ去て主個に告げ知らすも羞を興ふる業なりと思へば窃かに懐中より鼻紙取出し人知れず那んの金具を押包み其儘袂に投げ入れつ既に濃茶の茶碗をば主個の雨村にさし戻して一坐の茶事を稍果しぬ

第七章　どちらから移るぞ廊に今年竹

是より先にお糸は又那和三郎が此家に來れど大善、大喜等と俱に茶席に列なりて逢ふ事さへもならざるより最ともとかしく思へども去とて斯くとうち謂て呼びもされねば即なぞへ行くを止めて物語りをなさんと待てど其甲斐なくさらに便りを得ざりしかど雨村は此日の茶事も果て那大善等と俱個に暇を寛ろげ骨董の話しの序で和三郎の方を見やりて偖云ふやう「此和三郎とか云ふ

方は大喜さんが大坂から迎てお出のお主筋と聞て風話に聞いたれど御用がなければ拙主方へ二三日お止めまふした上年來所藏ふ軸物と茶器の鑑定を依頼みたいと思へば情願大喜さん御承諾を假て下さいと乞ふを大喜は聞取へず「イヤ此者は拙主が親戚の者で其以前は小田原藩の某が次男なりしも若氣の過ち些少不義の事ありとて父の憤怒に抵當うけ今では遠い大坂に居ッて主答となり居ッたも父に歸參をば詫んと江戸へ下りしものゆゑ其等の御用に立つ事なら御心配なくお止め置を下されたしと答ふるにぞ雨村は太くうち歎び「然らば則ち大喜さんの言葉に隨ひ和三どのを暫時借用致すべしと維て數刻に及し後大喜大善は作内等と等しく雨村に別れを告げ各自宿所へ立戻りぬ有左程に雨村は那んの和三郎を我家に止めて是より後日毎所藏の軸物と茶器の鑑定に狩野家の第ハ元來或は又唐畫なんとの眞偽を俱に語りて日を暮しつ稍四五日を過す程にお糸は雨村が眼を窃び一

夜那んの和三郎を逢ひ初しより左に右といよいよ繋がる想情に感ぜ義を累ねしかば白子雨村も此程は雨個が怪しき形狀を早晩うれと察せしに原ゝはふ糸が此日頃倶に死なんと覚ひにし情夫と云ふは和三郎が身の上にてはあらざるやと最い疑かしく思ふ折那紙橋の大善は再回雨村が住居を訪問れ此程茶事に招待れたる禮など述て懐中より一割の金具を取出し「ドキニ足なる金具は茶野の蝶〻毛彫にて元祿時代宗珉が精神を籠し名作なれど奈何した情山で那席の茶碗に入りしか不審に思へど其折か返し申すのも失禮なりと持歸り即ち只今返上をいたせば御落取下されたしと見するを雨村い訝しげに那んの目買を手に取揚げ「シテ那折の濃茶器に此金具の入りたるは如何なる理由か拙生にも知点行かずと稍暫らく考へ居りしが確と手を拍ッ、小膝を又進めて這は是れ先年拙生が身の放蕩から父の朋友小田原藩の國部氏に預けられたる寄宿中家の秘藏と其折に一見致せし品なるを今拙生

が手に入るとは偖も不思議とうち驚く狀を見るより大善は聲を潜めて雨村に對ひ「ろれで話しが了解ッたと云ふばかりでは御承知の行かねば只今拙生がお話しまうすも外ではない此頃當家へ来てお出の那和三郎と云ふお方はろの園部さまの御次男にて實は今度大喜さんが大方ならぬ御尽力で如何やら親御も勘當をお許しなさると聞ましたが定めし渠が貯蓄の品とは云へど那席にあらう道理もない事ゆゑコリヤ了解ぬと小首を傾け頷の遠りをうち叩くに雨村は再回何やらん心中に左様と頷きけん「イヤ和三どの〻本姓が了解ッ夫にて拙生の思ひ當りし理山もあれば既に出所は知れたりと云ひ終りッ、是より後除談に移りて去氣なく尚大善と物語りつ其日は頓て別れしかど雨村は獨り壯の裏にお糸と那んの和三郎が上に熟々思ふやう原來ハ先頃大喜等を此家へ招待し茶事のをりお糸に吸附け掠茶をば濃茶器に入れさせしが孫て和三郎と其以前取換したる那日買をッイ過失ッて茶と倶

に入れしに相違なかるべし去るにても此等の由を今さら兩個に公然と云へば却って不義を責め蓋を興ふる理由なれば先和三郎を大喜方へ戻して小田原の園部氏に詫を為させつゝ糸は又一回熱海の六平に戻して後に園部へ云ひ出夫婦になさんと既に心中を決めしかば偖其翌日和三郎を一室に呼び寄せ此度の禮を述べッゝ目録の金包なぞうち與へて俄然に中橋の某亭なる大喜が止宿に歸し遣りぬ糸は情夫和三郎が今日しも自己と引別れて旅宿へ戻ると聞くからに悲歎大方ならざれど去とて今さらうち諦て雨村に語るも恩義をば仇になさんと思ふより獨り嘲ちて迫り來る涙を袖にかし隱しつ頓て那んの和三郎と別れし後は鬱々と面白からず日を過ぐすに雨村は一日ふ糸をば身近く招きて温順に言葉を改め偖云ふやう和女を吾傍が賜身做たも知つての通り色慾に溺れたと云ふ糸由でもなく一旦斯うと云ひ換した情夫の貧に貞節を立て死なうとまでに覺悟をば極めた心中が偶然ゆゑ

此處の自宅へは連れ來たれど元來荆妻もない身なれば幸ひ和女を養女にして吾傍の家を嗣せんと思へど些少故障の出來た所から止むを得ず熱海の親父平六の所へ戻って居て呉れゝば和女が豫て死去だと云ふ其情夫にも表向途はして夫婦にさせて遣ると思ひ懸なき主個の言葉にお糸は流石羞らひて歎びながらも父の元へ戻るは最と面なしと思ふもいから詮方なくハイと計りに返答さへ小聲になしてさし俯き今さら雨村がその厚き實意に感じ暫時の中涙にくれて居たりしが主個の雨村は左に右とお糸を思ひさめ是より後四五日を過しのち此家に年來傭使ふ伴助と云ふ下僕に衣類其他の土産物など多く持せてお糸をば通し駕籠に扛させつ熱海の湯場の近邊なる彼平六が其住居にお糸は早くも着きにけり是より先に平六は二女お若が孝心にて雨村が厚き慈愛を受け二十餘兩の大金を茲に圓らず借受しかば是まで貧苦にさし迫りし米薪などの負債を償ひ日毎細工に用うべき楠板をも買

求めて[illegible]を勵むにぞ元水念佛平六と綽號を取し老人なれ
は茶屋を業とする者も渠等父子を憐みて殊さらか君を紹介つ
ろの客人命へ品物を買込む時さへ多かりしが一日の午後一挺の
駕籠を門邊に扛き卸しつ下僕と思しき一個の老僕が徐々此方を
さし覗き「モシ些とお尋ねまうしたいが此等に磯野の平六と申すお
方は有ませんかと問ふに怒く平六は戸外の方へ前み出で「ハイ平
六は吾儕だがシテ和郎には何處からお出に成ッたと訊かしげに
答ふる言葉を駕籠の中でお糸が斯くと聞仕つ忽ち涙の雫溢ほし
「親父さまにはお壯健で克くヤアお消光遊ばした今さら御目に懸
るのは却ッて貴父の御憤怒を增すに等しい業なれとてれには深
い情由あるゆゑ身妾が申す一通りお聞なすッて下さいましと云
ひッやをら駕籠の中を立出て虔敬へうち上るを妹お君ハ此時
まで父い勞に小細工の幇助をなして居たりしかど姉のお糸が今
此處へ來るを見るより身を前めおなつかしやと云ひさして後は

涙に口籠るを父平六は老眼にお糸をハッタとうち瞶み「誰かと思
へば畜生にも劣る所業の娘のお糸汝が爲に數年來勤めた藩邸も
不首尾となり果は流浪の身の上と成ッて此地に落着と覺にた業
の内職から漸ッと露命を繋いで居る親の辛苦も思はずに何の顏
さげて阿容々々と吾儕の所へ逢いに來たか父子の縁は結んでも
他人に等しい和女には決て用事はない程にサァ出て失ろと手
を振揚げ既に擊んとする所を老僕の作助はお君と倶に平六をう
ち和解ッゝ偖云ふやう「其憤怒は尤か知られど白子の且那さまが
態々此地へ迎られたお糸さんの身の上にも亦云ひ狀があらうと
思へば不束ながら此吾儕がお糸さんに代りお詫をすれば吾
儕に面じ揚しては下さらぬかと賴むを彼方の平六も元來兩個
の我子にて情くはあられと世の義理に支にられたる柵に正直一
圖の心中から餘義なく憤怒しも件助が今仲裁て詫たるを流石固
辭もされざるにぞ漸やく憤怒をうちをさめて言葉を柔らげ此方

に對ひ「お角和郎がそれ程まで仰しやるものを人人氣なく聞ぬも餘り失禮なれば其お言葉に面じまして夫なら奈何か勘辨を致しませうと述るを聞きお糸はさらなり作助もお君と等しくうち歎び發と一息吻きにけり

第八章　ひらく

子を發て歎にざるハ是なん父の過ちと司馬温公ハ比喩しかごろれかあらぬか平六ハ那作助が言葉に面じ長女が歸參を許しいにぞお糸は是より八王子の金藏夫婦に詐偽れて此身を苦界に沈めし事より雨村に賜身をせられし後死せしと聞ける和三郎に再回逢り合し事まで殘る隈なく物語りて那作助が携へ來し衣類と其他の土產物を即ち其坐へさし出すを平六ハ又うち眺め雨村が厚き親切を最と歡びつふし拜み此のち親子三個が互ひにうち寄り去年の冬死去せしお浪の事なんど語り出ッヽ殊さらに歎きを袖にうち覆ひぬ恁て此後お糸は又雨村が言葉を樂しみに妹お君と

倶伯に父平六の手を翔けて最と老百しく事へしうち早や秋の日の短かさも暮て忽ち十月の中旬となれど雨村から未だ一度の文音さへなければ獨り待不樂て那和三さまには恙なく最早歸參をなされしかと案じ泊光て神佛に祈願を籠なとする程に此頃熱海の近傍なる地藏堂とか云ふ村に或大智識の說法があると聞くより父に乞ひ願て件んの田舍寺院へ至るに此地は山里ながら其在鄕より出向たる老若男女の群集は宛然蟻の集ふに等しく居る座席もなき程なれば故大智識の其は高座に上りて恭しく湯を飲み珠數をうち揉て南無阿彌陀佛の稱名を口に唱へつ參詣の聽者に對ひ高々と聲を張揚げ因を推し果を推す佛家の說教に涙を流す老婆あれば或は情夫と手を握りて愉快を尽す小姐もある其雜沓は大方ならねど今一席を說き終りて暫時和尙が休息中此座の中に列なりたるお糸の側に坐を揖へし農民同士の甲乙が互ひに何やら話しゝ事一個の男子は其力に對ひ「今坊さまが說しッた因果

と云へば馬十どのも佐五兵衛どのも聞かしやったか箱根の獄に昨日の朝酷虐しく殺されて居た御付は若餅も平素出入をする國師さまの御次男であるとは夢にも知らなんだがナンー魂消た話しだと語るを洩れ聞く平六の娘お糸はうち驚き若和三郎の上なるかと思へば胸先づ騒きて言葉の端さへ遮しく失禮ながら其お方は和三郎と仰しやりは做さいませんかと問ひ懸るを那農民の某はふ糸を熟々うち見やりて「此等に見かけぬ女中衆だが奈何さま和女の云ッしやる和三郎と云ふ方に相違はなけれど殺害人は金藏と云ふ者だとか死骸の側に棄て有ッた傘の記號で了解ッたと惡い事は出來ないもの日天さまが見て御坐ると田舍訛りの發語を述るにお糸は聽あへず那んの男子に會釋もなさで忽ち其坐の群集をおし分け戸外の方へ立出つ心中も空に羅刹と綸海を指て走り行ぬ案下某生再說那和三郎は雨村方の所用を果し中橋なる大喜が旅宮へ戻りし後雨村が附與し目錄を改め見るに這い

奈何に金十兩と其他に預てお糸と取換せし春野に蝶の金目賞お包みあるにぞ訝かしく思へど今さらその理由を知られば主個の大喜にも語らで隠し置きたりしが其後大喜と雨村等が那小田原の和太夫方へ出向て園部和三郎の婦參を只願詫び入るゝに大喜の和太夫が父某に預られし因みもあれば速かに雨個が言葉を聞て元來亡妻の親属なるに雨村は又徳川幕末の直參にて殊に當時容れて即ち次男和三郎が勘氣を茲に許容しゝより舍兄へ元來一門の甲乙も亦うち歎び大喜雨村が尽力を殊さら賞し敢りとぞ和三郎は又久々にて父の勘氣を許容れて自邸へ再回立戻れぞお糸が事は左に右と忘れ難なき胸の裏を雨村が義理に隠てられて根岸の住居に別れし後さらに一回の文音さへする事ならねば嘸我を恨み居らんと明暮に思ひ焦れて鬱々と而白からぬ月日をば過すとなしに送りし中雨村は此頃小田原の落邸に訪問れ和太夫に自ふて云々彼お糸が上をば云ひ出で和三郎を自己が婿に賞ひ受

けか糸と夫婦になさんずと商量すれど是より先に同藩士なる某の養子に聚て和三郎をさし遣すべき契約を父和太夫が結びしより此義計りは親戚にも等しき雨村が依頼なれど承諾難しと謝絶るを元來先約なると聞き強て云ひ寄る手術もなければ其儘江戸へ立戻りて兩個が上は是までと暫姑思ひ止まりぬ有左ば復た和三郎は父和太夫の契約にて同藩士なる留守居役臼井喜内が養子となり其名も同苗喜一郎と改め君主の願ひも濟み頓て近習に召出され只顧忠勤を勵むはどに今はお糸が上をしも忘るゝとにはあらざれど去るもの日々に疎しと云ふ世の譬言も道理にて身分卑しき足輕の娘を今さら我妻に嫁るも養父の許さねば此頃同藩某の息女お袖と婚姻を取結ばせんと質父は元來養父の慾逸に默止されねば餘義なく其意に從ひつゝ茲に黄道吉日を撰んで那んの某が息女お袖と婚禮の儀式を行ひ是より後いよ〳〵其身を慎しみつゝ君主と養父に忠りなくろの忠孝を尽しゝかば竟に我君主忠

眞ぬしも渠が心中を最と愛て俄然に加增を賜はりつ養父喜内にたち優りし壯者ぶりとぞ稱されける然るに國部和太夫ハ此程次男和三郎が臼井の家の養子となりお袖と婚姻を結びし事を若し郡お糸が聞探りて養家に棒事を醸すに至らば吾儕のみか主君に對し最と面目なき事なりと思へば昨日箱根にて旅人体の侍が切害されしと聞たるより機會ころ宜けれと家隷の甲乙に吩咐て此度次男和三郎が上京に及ぶ途中箱根の峠で强盜の手に懸り殺されしと彼地ハ元來小田原の驛内までも悉く云徇せど和三郎は今其名さへ喜一郎と呼び改め忙しき出仕に町方へ出るも其だ稀なるにぞ藩士の外には和三郎が全く切られて死したりと思ハぬ者のそなかりけれ

第九章　旅人の囁耳にきかす雪の文

杞梁が妻は太く哭てろの廓崩れ城陷りしと云へる比喩のそれなられどお糸は既に地藏堂の説法をすら聞敢ず那農民等の物語り

を一圖に實說と心得しかは忽ち群集をかし分て息喘ながらに我宿所へ戻りて父の平六に偖云々と和三郎が今回の變死を告げ知らせて欷ッとばかりに泣き伏すを父平六も左側よりお糸が心中をおし量りて惘然と思へば身を前め「御主さまの御次男と不義密通の淫奔から親爺の顏へ泥を塗る不孝娘と知りながらも那和三さまを夫程に慕ふて是まで苦界に身を沈めて苦節を立通した和女の心中が惘然ゆゑ出來る事なら和三さまと夫婦にさせて遣りたけれど元來へ小田原藩中で系圖正しき武士とは云へ今では奥しい足輕の吾倅が娘と生れては兼人にも壓れぬ此縁致で其縁談もならぬけれど切て和女の肚癒に其和三さまの禦敵をバ撃ッて哲提を吊らふが婦女の道と云ひ慰む父が言葉を忝なしと聞取る實に金藏と聞けば是より八王子へ駈付け美事に其首級を討ッてお糸は沸出る涙をやをら擦き拂ひて再回父にうち對ひ「禦敵は確に直さま立戻れば親父さん身妾の吉左右を待ッてお出と坐傍の櫛

笥取出し自己から丈の黑髮アッ、と剪り忽ち若衆の大髷に結ひ換ヘッ、袴を穿き年來父の平六が藏む國の孫六の一刀腰に差かと帶び戸外をさして走り行きぬ北風梢を吹鳴して一天暗き中より早や入相の晩鐘と俱に霏々降出す雪の小路を踏分て此方へ來かゝる一個の武士は女子と見紛ふ柔弱姿容なれと自然と殺氣を含めるにや血走る眼元の容貌を故意と頭巾にかし隱し今八王子の金藏が表面の紙障を徐と明け會釋をなして座敷へ通し「御夫婦さんには此年來厚い御厄介を受たゆゑ今日は御禮を云はん爲態々此家へ出ましたと云ひッゝも未だこれまで見も知らぬ若衆姿容の武士に禮を云はるゝ覺にのなければ最と訝かしと思へども流石に楽ても置れねバ先づ茶を侑めなどするを那武士に懷中より水引懸し目錄を夫婦が前に取出して「是は些少な東西ながら參ッた駄しに御納め下されたしと只頭に禮を述るに金藏は此時までも女房のお佐代と顏を見合しつ揉手を做して居たりしが

其金包みの目錄を見るこ等しく退位の笑ひに聲をうち柔げ「お見かけまうした樣なれど殺伐渡世の自己ゆゑ殆と失念致しやしたシテ貴郎には何處からか出に成ッたか知らないが賜さると云ふ物ならば土用布子に密帷子品は撰まぬ此金藏先頂戴を做やせう と女房の方をうち見やりお佐代も亦所夫の側から言葉を添へ等んの目錄を手に取揚るをお佐代思しく禮を終述りて「貴郎は奈何やら小田原のお糸さんに御縁致の似たとは魯か瓜二箇と氣味惡るさうに云ひ出るを若衆の武士は徐々とろの身を夫婦の前に寄せ「ハイ其お糸は卑妾だが那和三さまの分身に付き能くも卑妾を騙欺いて苦界に沈めたその結局所夫と思ふ和三さまゝで殺害した讐敵は金藏さん最う知らないと夫は云せぬから只今出た目錄の中に包んだ所夫の起請を證據に和郎の性命を貰へば覺悟をせよと持添たる一刀直利と脫く手も見せず金藏目がけて切付しを思ひ寄ざる此場の雜儀に吁やと狙

狙ふ金藏の細首丁と聲落し返す及刀に女房のお佐代を擊んと做したれどお佐代の所夫金藏が今しも首を擊れしと見るより戸外に駈出て逃亡んとするをお糸は又那擊取し金藏の首級を引ッ提げ後追荒けやをらお佐代の黑髮を右手に捕へて引戻しつ「所夫の惡事を諫めもせず俱に助けて卑妾まで遊女に賣るとは道慾な好夫に連添ふ毒婦のお佐代思ひ知れやと云ひさまに浴せかけたる太刀風の鋭ぎき冴に大膽のお佐代も最早是までと必死覺悟や定めけんお糸が脚に貫線て支に止むるを突退けて再回發矢と斫付るに何かゝ以て堪るべき忽ち路上にうち倒れつ降積む雪の白砂も迸しる鮮血に四邊を染め宛然茲に紅ひの雪かと計り見紛ひぬ當下お糸は徐々とお佐代の死骸に十々滅を刺し頓て刀劍の血を拭ふて鞘に納めつ路傍の雪を掴んで咽喉を濕し偖擊取りし金藏の首級をば楚と風呂敷に包みて腰に卷付けつ幸ひ今宵の大雪に往來の人さへ絶たるより造化精妙と寺町を立出同町の驛舍

に至りて俺は小田原藩なりと云ひ詐欺を此驛内より三四里を隔てし小田原街道なる橋本驛まで傳馬駕籠を俄然に吟味けさ三個の雲助共に扛き荷はれ此夜子刻近き頃同驛中にて本陣を勤むる花井某の旅宿に着きつ上段の座敷に通りて夕餉を果し今日しも金藏夫婦等を殺害せし勞れを休めんと擬へ來りしうの首級をば兩刀を俱に床の間に並べて浴室へ行きたる留守同時に當家へ立到せし旅客は小田原藩内の勘定役を勤め居る曾根作内にて有けるが此作内は江戸表にて數年上船をなしゝかど近來本藩の都合に因り小田原表に交代しつ珠て八王子近在に妻の親戚のあるを もて暇間を乞ふて二三日前那首へ出向し其歸り此大雪に出會ッ小漸やく當家まで着しなれば先づ取敢ず上段の座敷に通れど俺より先一個の旅客のあることを宜くも知られば那お糸が設けし一室に入來りて等しく荷物を置並べて類りに下婢を呼び迎へ浴湯の準備を急がするに下婢は再出來りてお糸が座敷を通へる

由を告るに作内うち驚怒て忽ち一箇の包をば降り座敷へ持來りて紐引解きて改むれば今まで自己が品なりと思ひし包は生々しき男子の首級と替りしにぞ道は抑も奈何にと又驚き然々那んの風呂敷の擬樣を見るに先客の包と既に取違へど容易ならざる此品を獲りに開きし誤認より若し那旅客が武士道の意氣地を主張り奈何やうに解釋入るゝとも聞濟ずは切腹なりと致さんかと元來愚直の作内なれば其身の粗漏を自から悔ひ歎息なして居たりしかど偖あるべきに非ざれば お糸が浴場より歸るを待ち直ちにお糸が座敷へ出箇樣々を俺粗漏の罪を詫びッゝ那包をかゞ〈其座へさし出すをお糸は斯くとうち見やり忽ち顏の色を換に床に置きたる一刀を手近く引寄を拂へ「貴殿は何れの御家來か知られど拙者が太切なる此包をば斷りなく御覽せしこと奇怪なれ併し貴殿の御粗相と仰しやる上は此後の他言を憚る金打を願へまほしと云ひ逃るを那作内はうち歡び「粗忽の罪を早速に御聞

屆け下さらば抽者の大慶これに過ぎず然らば金打致さんと頓て自己がさし添たる小刀脱取り小柄もて形の如くに金打を果して再回邪若乘の顔を熟々うち見やるに流石勇々しく服裝し武士の姿容の其中にも自然と備はる婦女の擧動に何處やら出會し面影のあると婦且思考しが忽ち心中に頷きけん碓と諸手をうち拍き失禮ながら貴殿にハ根岸に居らるゝ白子氏を存じならんと問ひ懇たり

第十章　玉の緒よ絶になばたにぬ踏の味

當下若乘の武士は今作内に白子の知己と尋ねられし言葉にハット顔赧らめ思はず那んの作内と顔見合せつゝ恐き恥て笑ひ身を前めて「誰人と思へば作内さまに不思議な處で浮出會を致しましたと云ひさして最と羞らひし形狀を作内は又此時しも心中に左樣と察せしより訝かりながらも安堵なし婦且うち絶に會へざれと和女は確實にお糸さんシテ何故に精しき其服裝で生憎級を持ッて此家へは止宿られしぞ苦しからずバ抽生にうち碍給へと詰問ふ言葉にお糸も作内とは根岸に居りし其折々那大善が朋友なりとて雨村と親しく交誼を結びし而已か小田原の藩士と聞けバ殊さらに最とかしく思ひしかど彙は上府の身拘にて是まで多年江戸邸内に住居をすれば同藩ながら那和三郎と自己が身の情由さへ更に知らざれど今は隱すに隱されぬ此座の思議に和三郎と既に夫婦の契約を做し事より八王子の金藏夫婦に詐欺かれて此身を苦界に沈めし後雨村に購身されたるも彙の慈善に恥海なる父の許に歸されて兩三月を過すうち此頃那んの金藏が和三郎を箱根にて殺害なしと風話を聞き所夫の僞敵と父に乞ひ即ち武士の姿容に服裝ゐ夫婦を擊しなれと一伍十什を物語るに作内は又聽く事毎に且訝かりつ且感じて暫時返答もなさゝりしが再回お糸にうち對ひ「初めて聞いた和女の素性に合點行かぬは圖部氏今では白井喜一郎と名乘ッて他家の養子となりお袖

と呼べる内儀を迎へて夫婦睦まじく消光して勤務居らるゝを四五日前にも見懸たが奈何した事と手を拍き頻りに思考ある体をお糸は見るより訝かしみ「夫なら國部の和三さまは那金藏にも殺害されず無事で臼井の養子となり御内儀さんまで迎へた上勤務てお出なさるとはお恨めしやと眼を逆だて那者をハッタと白眼へしろの容姿は婢娼き者乗ながらも恐ろしき妖姤の悲歎に作内は今さら和三郎が身の上をうち歎しとろ後悔なれと思へと詮方なきまゝにお糸の心中を想像り「敵と思ふ金藏の夫婦を殺害したろの手際は天晴節婦と稱しても世間に羞ぬ事なれど婦女の狭い心中から一圖に左様と思ひ詰め他人の風話を證據に立て見談ッたが組相だと云はれぬ兩個の人殺しに謂ば天下の罪人ゆゑ是から吾俳も附添ッて小田原まで戻ッた上内々藩邸の同僚と相談した後性命に換に和女が今回の歎願を主君に願ッて見る程にマア氣を落着てお糸さん臼井氏との其情交は死なれた既往と諦て

思ひ切ッたが和女の爲と只顧誘め聽せしにお糸も漸やく本心に戻りて然々思慮るに元來身しき足輕の娘の身にて和三郎と夫婦にならんと契りしは最と浅間しき事なりを茲に忽ち煩惱の絆を斷て先非を悔ひ上の紀問を受し後生死を極めんと思ひしかば頓て那んの作内に涙を止めて偖云ふやう「及ばぬ契りと知りながら是まで只顧和三さまを所夫と思ひ詰たるより此身計りか父上にも深い悲歎を懸しとろ今さら心中に恥かしけれ是より貴郎のお誘めに就て奈何なり宜きやうに計らひ給はれ作内さまと依頼むに那んの作内も少しく安堵の思ひをなし「然らば明朝左に右と拙生同道致すに因り心中を沈めて居られよと此夜はお糸と俱に倘物語りなどするうち森を放るゝ鶏の聲に東方の天も白みしかが頓て主個の某に通し駕籠をば呼附てお糸へ元來自己も亦那んの駕籠にうち乗て雪の小路を扛き荷はれろの翌日の夕暮に彼小田原の濕内なる甘根が住宅に着きたりけり有左程に作内はお糸

を自邸へ連戻りて妻にも云々告たる後同僚い某と商量なしつゝ何にもしてお糸が性命を救はんと既に其向の役人に内々歎願なし〻所重役園部和太夫は此等の由を聞知りて今さら太くうち驚き顔して那んの作内を密かに自邸へ呼び寄せつ親しく骨根と細語くやう〻怪が不埒は云ふまでもなけれどお糸が斯くまで苦節をたて懸敵を撃しと過失ッたを承知ゆゑ抽者も情然ゆゑ抽者宜きに取計らひ性命を救ひ取せんに作内どのにはお糸を召連明朝役所へ出頭をなし給はれと述たるを作内は又うち歎く身の過失とは云ひながら夫婦を殺害した罪人をお救ひ下さる貴殿の御所存お糸は元来臼井どのも此儀を斯と聞れなば嘸かし満足たるべきに委曲は承諾仕つりぬと暫し時間話に及びし後即ち住宅に立帰りて翌日お糸を召連れつ役所へ出でしに其向の役人衆も揃てより重役園部和太夫が密かに計らひ設きしにやお糸を深く組もせず其儘自訴の罪を免して那作内に引渡與しぬ

お糸は既にこの時まで所詮性命はなきものと思ひ諦め覺悟を做し居たるも固ら救助りしに樹の魚のそれならずば實に優曇華の春に逢ふ心地せられて嬉しさの遣る方なければ作内を只ふし拜みて其恩義を深く謝しッゝ感涙なる父が住宅に立帰りつ偖云々と金藏夫婦を讐敵と過ち殺害せし理由より骨根作内が親切より此身の罪を逃れし事まで殘る隈なく物語りて只顧歎息なしたりけり是より先に和太夫の此頃次男和三郎が臼井の家の養子となりお糸が萬一姉の爲奈何なる事を做出さんと思へば親子の愛者から心中にもなき陽言を土地の者に云ひ徇させお糸に懇情を頼させんと計りし事より人殺しの罪に陥すも和太夫が過失なりと先非を悔ひ下役共に計らいせて假令お糸を助命しとて斯る不正の計ひもて武士の本意と云はれね ば寧ろ密かに切腹して俺潔白を主君初め藩士の者へも示さんと既に心中を決めしかば一夜遺書を書き認め切腹なして果たるに

ぞ和喜太は元來喜一郎も大方ならずうち驚き歎けど詮る事なら
ねば一家親戚を呼集へ頓て那んの趣きを主君にも屆け出しかと
此小田原の家臣にて門閥正しき家なるに身の過失を悔るの餘り
自殺なして死去せゑなれば國部の家は悲なく嫡子和喜太に家督
をば以前の如く賜はりつゝの相續をぞなしにける

第十一章　木枯の果は有りけり海の音

生者必滅會者定離と悟れば此世に望みなきか糸は今さら和三郎
の讎敵と一國に聞逢へし金藏夫婦を聚果しつゝの首級をさへ持
歸れど自己が爲にも意恨ある惡人ながら無慚にも夫婦が性命を
取りたるは最と淺間しき業なりと思ふ折から和太夫が那和三郎
を厭ふの餘り世に羞しき陽言を云ひ觸さしつ既に此か糸が性命
に係はるより茲に忽ち先非を悔ひ渠婦を助命て一日の夕切腹な
して果たりと曾根作内の報知に因り憑きながらも斯と聞き此身
の志望を果すべき機會ところ今や來りつれと思へば父の平六にう

ち對ひッゝ涙を拭ひ「年頃厚い御恩をばうけて御主と侍きし和太
夫さまに切腹をさせたも元は和三さまと卑妾が不義を做た罪ゆ
ゑ情願慈善に此上は卑妾を尼僧になし給はゝ金藏夫婦の上はさ
らなり和太夫さまと且ゝ又去年死去れた母さまの菩提を厚く吊
ゝんと自己が志望をうち諦して依頼むに父の平六も元來念佛と
綽號を取る善心無二の老人なれば異議なくこれを承諾てお糸が
心中を賞賛しつ莞爾と笑ひうち歎ぢ「和女が尼僧に成らうとまで
心中を決たは吾儕が身に取ッても恰好僥倖ゆゑ情願得道做た上
で念佛塚を此の地に建て後來衆人の誠めに功德を施し呉よかし
と吾儕も押付け此か君に婿を迎へて困窮ながら家名相續させた
後頭上を圓め同心と成ッて往生する氣なれば翌日とも云はず今
日直ぐに上多賀村の淨念寺ゝ此磯野家の香華院ゆゑ和女を同道
做し上御弟子にせんと老實に早やうの準備を整ふるにお糸は
採て自己から望める出家の道ながらも流石兩個の伺胞なる妹お

れに別るゝを暫時の程はうち嘲ちて默くを父の平六に促されッ、未だ高き未刻の日脚を脊に受つ我家を後に上多賀の寺院をさしてぞ赴きける有左程にお糸ハ父の平六に同道されつ熱海より十町餘り隔たりたる上多賀村の淨念寺に到りく住職に面謁を乞ひしに當住了覺と名乘る僧ハ在俗なから當時智識の聞にある三綵山派の末寺なりしが元來磯野平六とハ元來檀家の因みも有りて殊に當住の平六が念佛歸依の心中を愛で東西など贈りて憐れみしに今平六が我寺院を訪ふと聞くより一室に迎へ茶菓を侑めつ了覺ハ黑衣うち懸け徐々と珠數爪繰て此方へ立出で「平六どのにはうち絶えて近來お目に懸らねど何時も壯健で居らゝるが又何寄の僥倖と述るを那んの平六ハ頭上を擡げ手を揉みつ「ハイ壯健では居りますれど年を取てハ何事も意り勝で當院へもッイ御不沙汰を致しましたシテ今日吾倅が參ッたのは方丈さまへ折入ッて些とお願ひが御座いますと娘の方を見返りて住職に對ひ云々

と是よりお糸が過失から金藏夫婦を殺害せし事と又和太夫がお糸を助命て切腹なしゝ顛末を悉く語り此の上は娘の志望に方丈の御弟子と做して給はれと只願依賴むを了覺もお糸が上の幸なきを憫然と思へバ心善く直ちに承諾き所化僧の某に吩咐て佛本堂の佛前に燈明を照し水盥を形の如く置並べお糸を其所に居らせつ此時住僧の了覺ハ先恭しく本尊の前に座を占め香を焚き聲時讀經をなしたる後やをらお糸の後背に佇立み刺刀寸に持ち口の中に彌陀の稱名數回うち唱へッ、惜氣もなくお糸が丈の黑髮を茲に忽ち剃落して其法名を無覺と名乘せ覺に尼僧となしたるにぞお糸の無覺は云ふもさらなり父平六も了覺に厚く禮をば云ひ述つ是より無覺ハ近邦の在村々を托鉢し行脚をなして布施物に貰ひ溜たる金錢もて熱海村と小島村の中間に念佛塚の石碑をば建立なしつ草庵を此地に結び金藏夫婦が上は元來故主和太夫と俺母お浪が菩提の爲旦暮念佛三昧にて乃ち慶應

元年より明治三年の三月まで殆んど丈に八年間行こゝまして居たりしが是より先に平六は妹お君に相應しき婿を迎へつ困窮なから磯野の家名を讓りしかば自己も頓て香華院なる淨念寺の了覺が御弟子となりて了念と法名をさへ號けッ、娘無覺と倶に御島村の草庵に同居をなしつ此日頃托發執行に歩行しも俄然に病病にうち臥しゝに此年三月廿四日行年六十五歳にして眠るが如く病床に大往生を遂げたりとぞ有左ば妹のお君を初めお糸の無覺も今さらに父子の離別をうち歎けど佛あるべきにあらされば形の如く葬送なし後丁寧に吊らひしが此後明治五年の冬無覺は二十七歳にて俺庵中に終焉を遂げ今御初島の念佛塚と土地の者の噂するは是なん無覺が佛果を得し其記念ところ云ふべけれ不顧臼井喜一郎ハ義父喜内が死去せし後お袖の情交に男子を擧けりの名を喜太郎と號けッ、最と睦ましく暮しゝうち維新の際の騒亂に主君ハ元來落士等も各自散亂なしたる後再回小田原に戻り來つ即ち嫡子喜太郎に士族の名義を名號しつ自己ハ頭髮を剃落して法名を無想と名乗り斗數行脚の身となりて諸國を遍歷なしたるも無覺が死去せしろの翌年初島村なる念佛塚の草庵を訪問れしに無覺が去年死したりと聞くより渠尼が供養の爲め那念佛塚の近傍りに一宇の阿彌陀堂を建立しつ此堂守をたりし上無覺が那んの草庵に今尚無想の喜一郎も後住となりて消光せるとか現に友人某氏が迂生に語りし實話なるを拙劣き筆頭に記載して斯く長々と綴るになん

絲　柳大尾

欠

MISSING

反魂香

第一回

三品蘭渓著

宵月の光はの暗く川添ひ柳の波に懸り昨日の雨に水溢ませし小川の流れ音高く耳を清むる響きあり目に見にぬ夜風の涼しさを我が物顔の夕涼み此處小梅村と知れたる引舟通りの川岸に細長き一脚の涼み臺を据ゑ最と睦まし氣に集ひたる三人ばかりの小娘が何か嬉々し私語きてハキィ〳〵と甲走る笑ひ聲を洩し捨つて見たり擲て見たり小猫同志の戯れ合ふ如く餘念もなげに狂ふう ち中にて一番年嵩と見ゆる十七八の肥滿婦が何に機嫌を損ねしか小し辟曲たる樣子にて「宜ざいます澤山左樣な意地惡をお云ひなさいお寒ちやんお秋さんが那樣なをを云ひだからお前もモウ那處へお出でないよナァニお秋さんの處へ行なくッたつて眞助どんに頼みさへすれば何時でもお庭へ入れて貰ふ事が出來てのだよ、お秋さんはお暇しいから最うお約束が出來て仕舞ねの

でせう夫れで妾ひ迚がちよかいを出すと不可ないので態と見せない樣に爲さるのだよお秋さんお日出度う何時也御祝言をなさいますのオホ、、、、「アラマア否なお非さんだと左樣な事を云て妾をお窮なさるのでせう」「イ、エ爾うでございますよ夫れに迚び有りませんダッテ妾が家へお出なすッては不可ないとも何とも云はないのに種々な事を云て散々お弄笑あさるもの「夫れでも只た今爾うお云ひ爲すッたぢや有りませんかチェお冬さん爾う〳〵何時の垣根からお隣家を覗いちや不可ない最う誰にも見せ無いのだと謂う意地惡をお云ひなすッたにさ「アラ夫れは何んなのですよ餘り皆なが那所を覗いたので遂々那の方に知れたと見に那處を塞いでお仕舞ひあすッたの夫れだからモウ覗け無くなつたと云たのですワチ「オヤ爾う夫れぢや妾が聞き間違へたノ夫れにしても那の方は何故左樣な意地の惡い事を爲さるンだらう福ちやンと肌次郎と桑之助と權十郎を一緒に搗乱た樣な麗し

い御姿を持て居ながら妾迚にお顔を拜まして下さら無いのは眞正に那遣りなお方だワ「オホ、、、お冬さんは一番道上てお在だと見に一さいとしても那の通り勃氣になつてお怒りだワ「能いよ何とでもお云なさいヨと三人寄れば姦ましき遣葉娘の金切聲ジイ〳〵つく〳〵蜩鳴り立る秋の蟬にも增る可く葉末に集く蜻蛉も呆れて其の音を止むるなる可し時に彼方の横町より傍觀も觸ら中急々と此所へ迫り來る娘あり夜目にも夫れと透徹る月の桂の艶清く露の滴る優妾齡い三五を二ッ三ッ過越し方の身分さへ最さ床しく思はるゝ人品良きに引替て身の痩見ゆる小倉帶そぼろと云ふにはあらざるも洗晒しの功を經た白地の浴衣を晴れ衣の錦繻頭は手づくねの疣尻卷き外見も飾りも内證の切なき譯に逐れてか涼しかる可き目の邊にも何處やら含む瑠璃の露蒙れ勝なる子にて今お冬等の居る前を通り過んとする折しもお冬は目早く夫れと見て「オヤお季さん何處へ行ッしやるの一寸と此所へ

入ッしやいな今好い話しが有りますのマア涼んで在ッしやいヨ「お季さん妾の側へ來るのはお否や夫なら能いぢや有りませんかサア此所へお掛なさいよ」「お季さん餘りですチ默止て妾達の前をお通りなさるんだものと三方一面に鏡舌り立られお季は持餘したる風情にて餘儀なく开所へ佇立みしが彼方の鏡舌る途切れを伺て漸々優美かに笑みを含み「妾ゑは是れからお使ひに參るのでお話しを致しちや居られません夫れに此の節は悪い病氣が流行りますから貴嬢方も永く涼んで在ッしやるとお身體の毒に成りますでせうモウお家へお歸りなさいましな明日もまたお目に悪つて綏りお話しを窺ひませうと儘かな事にも實意の見はる床しき言葉を跡にして愛嬌損ねぬ會釋と共に急急行方へ逃り行きぬお季に心付られ心此方の娘三人い俄かに衣類の濡りを拭で冷やりと來る川風も一ト居身に染む心地やしけん漸々其所を立上り「夫れちや歸つて寢る事にしませうお秋さん明日もまた乾度ですよ」「能う

ございますとも貴嬢がお出なさる迄にチャンと覗く處を拵へて置きますワ」「欺すと承知しませんよと何にを云ふやら喧嘩き合ひつゝ我が家の方へと歸り行く扨て此の娘達三人に斯くまで上々吉の嗜さをさるゝは如何に艶福ある若人にや倘は何處の人なるかと其所等の樣子を尋ね見んに彼方の横町を右へ曲り行くと半町ばかりにして左右に柴垣を結ひ圍らせし一ト構への別莊あり茅葺造りの門を入れば五百坪ほどの空地にて其所に數百株の梅樹あり若し花咲りの頃なりせば居ながら月ケ瀬の風情を眺む可く羅浮の清香をも掬し得られん正面の玄關へ至つて小体に見受けられると其の割に奥の方手廣く應接所あり客間あり中にも居間と覺しきは庭付きの八疊にて物數奇萬端拔目なく其の人品も思はれしが此所に豎けく閑居を占むる未だ年若き主人ところ即はち娘達の持て囃す評判ものとは知られれ主人ハ其の名を梅原馨と云ひ華族梅原家の三男にて幼稚き頃より學事を好み己に高等

小學をも卒業せしかど惜いかな性質甚だ多病にて此の上深く勉強されなば必らず肺病に罹られんと醫師の忠告するを聞き兩親最愛の末子として其の氣遣ひ一ト方ならず強て學事を中止せしめ尚ほ何事も等の望む儘に任せ即ち此所の別莊へ斯く入れ置るゝものなりけり然れども馨は他の貴公子方を逸ひ自ら華族ぶる事を心快らず思ふより萬事成る可く質素を旨とし世間へ我が身分を知らしめず尚ほ家内の召使ひも男女二人を置くのみなりき若し是れ等の委しき譯を早く彼い娘達が知りしならば縱令戀れて死ねばとて雲井に近き御方にと内々飯屋のお里を擬り思ひ絶るに至りしならん扨て馨は今育しも一人居間の内に在り伊達羅の風に搖めき渡る竹樣の片傍へ小町形の卓を置き銀子張の短冊に打向ひ好める小説類にやあらん餘念もなげに見遣り居りぬ珠を延たる其の姿艶妖かす嫣艶からず温和にして品格高く四邊を拂ふ風采ありぬ「若さま才兵衛が參りました此方へ通しても宜しう

ございますかと徐に彼方の襖を開き手を仕きながら寛ひ出しはお政と呼るゝ侍女なり馨は徐ろに其方を振向き「何で今時分來たのだらうマア此方へ通しなさい」畏まりましたとお政が引退る程もなく怖々此方へ入來しは孫て梅原家へ出入りする骨董商江口才兵衛と云ふ男なり見るから氣輕者らしき顏付なるが先づ其面目に开所へ座り「エー若さま御機嫌能しう其の後は大きに御無沙汰を致しました勿論根岸のお邸へは絶ず窺ひますが此方へはッィ何なのでハ、、ィヤ相變らず御勉強で在ッしやいますな併し其の御勉強が甚だ御身體に宜しくないので昨日もお邸へ上りました處那ア書物にばかり耽つて居ては實に困るチト側妾でも置くやうにお前好く勸めて呉れろと奥さまが呉れ〳〵の仰せでございました夫れに付き少々心當りがございますので一應思召しの處を窺はうと思ひ斯やうに態々罷り出ました」夫れは深切に恐縮ない併し政も居るし其助も居るし此の上召使ひを置くには

及ばない夫れに私は成丈け人の意いのを好むのだ「お召使ひと申しても お政さんや助さんの様なのでべこざいませんエ、那の何なので……「何だか一向に分らぬが何故判然り云はないのか「へ、、、夫れでは手短かく申し上ますがエー那のお側妾の事でございますお氣に適たのをお置きになり折々合乘か何かで浮々お出掛になりますと第一お胸が開けるので苦い藥劑などを飲ずも病氣御全快に至るのは私しが屹度お保證申します陽うなって御覽じろ御本邸の皆さまが那れ程お喜びでございませうか第一斯く申す私し迄が……「オヽ〳〵才兵衛一寸と待ちなさいお前夫れでは私に妾を持と勧めるのだチ取も直さず私を不道德者にしやうとの所存であるな實に怪からん男だ左樣な事を勧めるなら再び此方へ來て呉れぬが能い現に此の程中社會の一問題になつた廢娼論等の次第を何と心得て居るのか古來から一夫多妻を習慣にするモルモン宗徒の賤味人ですら方に其の惡幣を知り退々改

める方に傾むいて居ると云ふ程である夫れに何ぞや私に妾を勧めるとは實に言語同斷なる次第であるぞと流石に學事に心を委ね胸中清潔く在すだけ時流の甘言に浮されず道理を分て陳立らるゝに才兵衛は忽ち恐れ入り「私しは貴君さまの事を決して蔑生なぜゝ申し上た譯ではございません何かお氣に障りましたら何卒御勘辨を願ひ上ます夫れに貴君さまが權妻なぜよりもモルモットの方が能い那れを飼て置たいと思召すなら恰度上等の拂ひものがございます早速御覽に入れませうナニモルモットでは無いモルモン宗だホイ是れはシタリ飛だ間違ひを致しました序にモ一つ間違て先日のペルモットを萬望一盃頂き度いヘッヘ、、、

第二回

破れ垣根をも便りとして樗れに花咲く夕貌あり見に透く眼が伏屋として樂しき囲繞のなくてやは同じ小梅の裏町に軒端かたふく

一ト揃へ崩れ目著き壁際のアナ淺ましく見られぞ内ぞ床しき同胸二人一人は彼のお季にて又た今一人はお季の舍弟遠雄と云へる小童なり年頃十二三なる可きか嫌致はお季い麗くしき面影を寫し殊更薄紅色に彫みたる兩頬の色澤にも活々とせる氣性を顯はし圓くギョロリとせし二タ皮目も高尚くて憎らしからず今我が手に開き持る書物の上に眼目を注ぎ熱心なる調子にて「章が迅速に成長す何を集等が形付り爲すか文章を文章へ何で有るか……」とクエッケンプスの文法書を頻りに複讀する片傍よりお季は針仕事の手を留めて莞爾に打聆仰げ「道ちやん大層好く御精を出しだチ其擬梅では今度の試驗にも屹度また及第してお母さんをお喜ばせの事だらう妾も如何なに嬉しいか知れませんよ併し餘まり勉強を仕過して身體を惡くすると不可ません些つと戸外へでも出て氣の晴れる樣にお爲なさいなと眞實込めて勞はるも母や其の身の憂苦勞を道雄が深く察し遣りヤッキとなつて勉

強する健氣な心を思ふに付け若し病氣でも出ハせぬかと案じ過すも其身の實意言葉の末に置く露の色にも見にて最と頼母し道雄又た色まで もお季に案じさせまいとてか態と元氣好き調子にて「姉さん左樣な弱い事を云ちや不可ません僕だつて智育德育體育の事は度々先生に聽て能く知つて居ます學問が何程出來ても身體が弱くッては不可ない健全な身體にハ活潑な精神を保つ智識と健康とは並んで發達させねば不可ぬ此所が一番大切なのだと能く知つて居るのですダカラ毎日學校の運動にはプランコでも競走でも綱引でもシーソーでも僕が一番先へ出て一番上手に遣んです此の間も躰操の先生が來て大變褒めて呉れましたぜ實に姉さんに見せ度い樣だ夫れだもの家で此の位ゐ勉強したつて何の病氣なんぞに成るもンか姉さん其の積りで少しも心配しちや不可ませんよと痩たる腕を伯張らせ力身で見せる可笑さにお季ハ思ず打微笑み「お前さんは幼稚い時分には誠に脾弱で有つ

たがお父さんが御病沒りの後大層健康にお成りのでお母さんも安心してお在だが在れでも亦た空横みな事をせず身體を大事に仕て下さいよオヤお話しを仕て居るうちに最う片蔭が出來ましたお妾は仕上た鼻緒を持て花川戸まで行て來ますお母さんがお起になつたら爾う申し上て置てくださいヨと寢る目も睡ずに仕上たる内職仕事の鼻緒を纏め稍や身を起さんと立かゝるを道雄ハ慌忙て押留め「姉さん夫れは僕が行て來るよ僕を遣てお呉なさい「夫れでも勉強の邪魔になると不可ないから矢張り妾が行て來ませう」ナニ構はんのだよ僕ハ何時でも歩行きながら暗誦するンだ而して歸りに先生の處へ寄つて種々質問して來ますと同胞思ひの元氣好く無理に鼻緒の包みを引取り彼の洋書をも無造作に狹き懷中へ押入つゝ勇み進んで出行きぬお季は其の跡を見送りてホロリと落す一ト雫露けき袖に置く露の果敢なきにも增す身の上を深く考へ過してか濡り勝なる樣子にて悄然り俯向く其の折

しもかゝ〳〵日和下駄の音を響かせ遠慮も無禮げに入り來るは五十前後の老婆なり顏の色淺黑きを通り過してドス黑しとも云ふ可きか凹める目付き反たる前歯いづれ一ト癖あるらしさが衝く樣端へ腰を据るをお季は夫れと見て仕事を片寄せ「オヤお時さん能く入つしやいました所は何でございます此所へお登りなさいましお構ひなさるな此所で能いのだよ時に早速ながら耳よりな話しが有るので早く聞かせやうと思ひ大急ぎで來ましたがお母さんは如何しなすつた浴湯へでも行たのかチ「イ、エ少し感冒を引たので奥に寢んで居ます」妾の話しを聞せたなら感冒なんぞは直に脫て仕舞ふだらう一ッすと此所へ呼でお出なと甲走りたる大聲にて四邊り構はず哦鳴り立られ廣くもあらぬ家内とて早や其の次第を聞け付けんお季の母は何事にやと隔距の障子引開けて徐々く所へ出來たればお時は座る間も閑かしさうにシリ〳〵片膝を躍りよせ「お母さん好い話しが有るんだよ眞にお前さんは

僥倖せ者だ今話して聞せるから能く氣を落着てお聞なさいよ妾の知て居る人がお出入をする先に銀行へ出なさる非内さんと云ふ若旦那があるのさ其の方は男前が好つてお金が有つて程が好つて實意が有つて夫れは〳〵近所大評判の若旦那さ妾も今三十バかり若ければ打捨ちや置かないが何を云ふにも此樣な梅干老婆ぢや仕方が無いゝ、、、開所で其の若旦那がチ何時何處で見初めたのの此方のお季さんをチラッと見初め是非那の娘を妾に仕度い仕度金や月々の手當金は何程でも望みに任す是非とも周旋して呉ろと呉れ〳〵其の人へ頼んだので又た妾へ頼んで來たのだが鐵の草鞋で捜しても此樣な好いロは又と有るまいお季さんばかりで無くお前さん迄が左團扇右團扇の煽りを遁れて早速浮みに上れる譯だよ妾だッて五圓や七圓の安ッぽい樣妻ロなら斯うまで大骨は折らないが相敵の好いのを見込んだので成る丈け先方を通さ無い樣にと種々骨を折て上るのさお母さんもお季さんも

別に否哉は有るまいが何しろ一應聞き糺した上晩方までに返事をすると請合て置たのだよ开所で丈度金や月手當の處を何程くらゐに切り出したものだらうチェお母さん見込の處を云て御覽なと自己一人り心得顔に桂庵ロの止め途なく舌に任せて饒舌り立てられお季の母は果氣に取られ腹立しさとロ惜さとを胸に湛へて目を睜張りお時の顔を見詰め居たるが忽ち又た胸を鎮めて密と片傍を振返りお季の樣子を窺ふに是れも口惜さにや堪ざりけん云はれざる目の裡の露に思ひを含ませて虚らず見合す顔と顔母へ急よ堪に難き心をッと推鎮めて淋しさうに笑みを霜び「お時さん御深切に有難うございますが此の娘を妾樣妻に出す位ゐなら是れ迄妾ども外飾を捨て斯やうに苦しい目は致しませぬ三度の食事を二度にしても心を正しく持て居れば人の翫弄み者になりろで無い栄花を爲るに增す樂しみがございますす妾の口から爾う申すとお笑ひでも有りませうが親にも增て健氣な此

の娘何誰がお勸めなさらうとも何で承知いたしませうぞ以後とも其のお積りで万望此樣あお話しは此方へ仰やる迄もなく直にお斷り爲すッて下さいましと昔しを忘れぬ言葉の節回き中にも角ありて動がす怯まず云ひ放つにお時は忽ち見込が違ひ扨ても慾氣の無い人かな何程痩腕を突張らせても腹が減つては詮ない ものをと沸々口叱言を噛み混せて微びた頬桁を膨らませ立つ足もなき風情にて何時か樣端を辷り退き密々外の方へと出行きぬ跡に母娘ハ顔を見合せ口惜し涙を拭ひも遣らず身を戒はせて居たりしが母は膝を進ませてお季の手首をシッと掴り「ア、世が世で有るならバ身屈い賤しい人達に斯まで輕蔑られはすまいものを夫れを今更云ふたとて返らぬ愚痴では有るなれど昔時は錦をも立た身分多くの人に付れ時勢く迄に榮にし者が見る影も無い今の有樣ろれも妾は夢と謂らめ思しみもせ十歎きもせれど花の盛りの妙齢を仇に過ぎ行く其方の身嘸ぞ本意なく思ひもせ

う口惜き事もあるならん氏も嫌級も斯ほど迄人並々に超にながら何の因果で此の樣に形き無い日を過さすか親甲斐も無い此の母を親と思ふて常日頃優しく勞はり呉るに付け丞辱ないやら嬉しいやら寝た間も忘れぬ妾の胸を思ひ遣てとばかりにて氣丈な樣でも老女の愚痴には脆き露の玉碎けて轉ぶ膝頭をお季はッと動搖かし元氣を添ん心にや態と片頬に笑みを含み「アノ母さんとした事が良ない事を仰います妾は斯うして何時迄も貴母のお側に居りさへすれば數にも足らぬ跟難を何の厭はう厭ひませう夫れに又たアノ道雄内の樣子を察してか健氣に勉強しますので迫付け首尾好く修業を仕上げ立派に出世いたしませう其の行末を樂しみに萬望心を大きう持ちッヨ〳〵爲すッて下さりますなオ、斯うしてお在では又たお感冒と障りませう妾しも日の有るうちに張物を片付ますサア〳〵早く奥の間へと勞はる孝心喜ぶ慈愛隠てぬ中の破れ障子を開けて立入る母親の跡をお季は見

遂りて急々に所を立上り外方の横日蔭らぬうちにと軒まれ物の洗濯も女の所爲の一人前に足るや盥の水入らず洗ふも張るも手一つにて外途の方へ運び出し夕貌垣の片傍へ寄うる雨戸の節の間も位に過さぬ所帯ぶり取乱したる樣にても日向に惜き夕貌の花にも增さる風情なり「若さま一すとお待ち遊ばせ御覽に入れるものがございますと突然頓興なる聲にて呼び立つるは例の骨董商才兵衛にて五六間はさ之れに先達ち今しもお季の屈み居る遂り近くへ進み來しは彼の梅原醫なり此の日才兵衛の爲に强て何處へか誘ひ出され今ろの歸途と察せられしが醫は才兵衛の呼び聲を耳にも留めぬ樣子にて搖はずヌン〳〵行き過ぐるに才兵衛急よ氣を焦燥ち「若さま一すと其の夕貌を御覽遊ばせ如何も綺麗でございますセッラ所の右手に……イヽエ垣根の側でございますッラ大きな聲くしい別……アヽ不可ない餘まり夢中になつたので遂々鼻緒を切らして仕舞たモシ若さま一すとお待なす

ッて下さい既足で道中がなるもンかお足ヤ本郷へ行くわいなアヽヽヽ何コイ笑ひ事で無し無暗に饒舌つたので遂々御本尊に背後を向れて仕舞ました併し若さま素晴しい別嬢ぢやございませんか那れが孫て評判の孝行娘かも知れません何しろ私しが奇計を放つて一すと擧動を探偵して見ませう所で能く御實驗なさいましと云はれて密は苦々し氣に笑ひながらも陰方なく所より少し隔ちたる樹の枯の片傍に佇立み見るともなく見ぬともなく手持無沙汰に覗ひ居たり才兵衛ハ跳足ひき〳〵頓てお季の側へ行き然も眞面目らしき樣子にて「誠に申し兼ましたが何ぞ裂屑を少々頂かして下さい此の通り鼻緒を踏切して困りますのでッ……「オヤ左樣でございますか夫れでは麻苧を持て參りませうナニ麻には及びません其の盥の樣にある糸屑で深山です「夫れでも大屑溜れて居りますと徐かに取上て水を絞り才兵衛の前へ差出す途端遠か彼方に佇立み居る際と蹠らず顏を見合せ互ひにク

ワッと誘さす目許まよしき情日光思ひを離れに夕茶ゝ空にはあらで吹き南むる身に染む風や丸何ならん怨か無常か後の事分ち難きが浮世なりけり

第三回

男の艶妖しくニヤケたるは特に淺ざく酌きものなり若し眞面目に捕へ居らば何處へ出ても恥かしからぬ凄々しき人品を持ちながら自己ばれ消々たる野心の爲めに自ら甘んじて品位を降し通りすがりの子をおぜにオヤ御飯かと云はれるも此上もなき名譽と心得顔にて痴病漢と笑はれるも知らぬが佛に緑のある寶頭虚はとに面を光らせ安香水の臭ひと共に鼻持ちならぬ氣障氣滿山斯る罰休の人物に限り知らぬ事も知つた振に知たとは意よ出滿吸り他人の内證話しを聞き度がり云はずも能き暗穴を穿鑿り是所等が好男子の本役だなぞと詩な嘆吹きをひゝかゞて自己一人澄し込めど疑惑や男にまで忌み嫌はれ爪弾きされぬい稱れな

りかし越に井内と云ふ若人あり同じく氣取やの連中なるが親類が一代に造り出せし黄金の光りを身にひけらかして丈夫な當に生て金銭を被せ親が切角拵んで見れた通三と云ふ名を偽なりと賤しみ自ら小鮭と雅号を呼びて心ある人々に井の内の蛙大海を知らずと嘲り笑はるゝも頓着せず團扇を清玄を取進へて盛りに俳諧の旨味を論じ古歌や〳〵と音を搔くる調に嗚呼の痴漢なりき扱て其の男振如何にと云ふを並に事新らしく書立るまでも無く先頃歌舞伎座の「左小刀」に言美髮が扮して淵りを取りたる三浦頼五郎を迚來たり當世風に扮裝はせなば殆と伯仲の趣きあり なん身分は親い成光に依て當時某の重役株家には亘蔦の則あり是れで婦人に如れずば自己一人ろり身になれも敵して淺ましからの間さに情れ狀れも場とき場になりて寝所を打つ接遇疾しにア、我を知る紅拂なしと自圍駄踏でも追付か寸逆に漸々我を折て妾を拾へんと思ふ矢先ちフト似のお寺を見初めしかば口

入れ老婆のお時を組み一度断わられしにも性懲なく今日又遊廓に遊はし流石自分は其の悪事を俟んとて一人墨堤へ赴き川岸の小座敷にて客なしく酒盃を傾けながら使者の注進如何にぞやと胸を冷して伏ち慰け居たり近く欄に椅て空を眺めば天河一帯の白露を含み清氣俗骨を洗ふに足りなん餘て遠く波上を眺まし火影々に照り渡り秋涼肌膚を動かすに足る可し光月の金蟾を照すなきも好き銀波を泛すあり蒼靄として黒く岸辺は今戸橋上を往来する山部の樹木なる可く明滅として近くは人力車の提灯なる可し乱の絶景を眺め乱の長江を渡し前には芳艶の緑柳あり長堤十里の櫻花なしと雖も亦た何ぞ酔ひを帯ずして可ならんや然れども心此所にあらざる禍三は何の度賞する處もなく只だマシ〳〵と四辺を見廻し最う日が暮てから餘程になるが何故早く帰らぬのだらう併し近くなる處を見ると此度上者尾に逃ひあるまい此の間は支度金の事を渡すとも云はあんだの

で向ふも如才なく勿体ぶり一つと故意つて見たのだらうが今日三百圓と云ふ高を聞いたら無論喜んで黙首くだらう何しろ遊事を聞かぬうちは酒を飲でも酔ひが廻らず希を喫つて旨からず只だ駄先が怪つくばかりだア、最う時つて来さうなものだな来れば女中に云て有るから直と逃れて来るに違ひない併し那奴の事だから遣た人力代を握り殺しゴロ〳〵歩行いて帰るのだらう言に思ひ遣の無い意張りと嬢だイヤ思ひ遣が無いと云へば先刻小便に行た時那處の座敷で何やらガヤ〳〵云つて居たのを何心なく立聞くと矢張り那藝の相談らしく急よ取極まつてお目出度いとか玉椿の入千代までとか此方の心中も察しないで無暗に目出度がつて居たが那れ等は一体何者だらう地獄か官員に違ひない様だオヤ是丁が聞にるぞチッキリ来たのだらうと急に居さまを正しく直し廊下の方を見遣るとち見がでございますサア御遣入りなさいまし且那お待ち遠のお老婆さんがお出にな

りましたと女中の案内に引續きノッ〳〵小座敷の内へ進み入り来座の方へ躍り居るは例の口入老婆お時なり大早に夕立を望むは〻待ち暮れて居かる禮三は我れ知らず前い方へ乗出しサア〳〵〻イと此方へ進みなさい早く迯い息吻さに獻上しやうホイお銚子が替り目だ嬢さん熱いのを早くだよ者も旨いのを見繕ッてドシ〳〵持て來るのだよ能いかへ早く頼んだヨと今までの氣色に引變り て一人り先づ女中を引下らせお時の返事を待ち兼て我より〳〵膝を進め「お時さん大きに御苦勞でしたお前さんのお骨折で無論旨い工合に行ましたらアノ娘も私しだと知れバ二ッ返事で喜ぶ筈さお袋が例の頑固で何か故障を付けたにしろ所はお前さんの巧口で首尾好く説付て呉れたらう手支度金の三百圓は直に遣ても宜しいのだ所で月々の手當金は十圓位ゆで上度いが先では何程と切り出したか手此奴お時の默物も今まで氣を揉せて置なながら此上苦しめて笑ふ積りか下を向た儘ま默止て居るとは怪からんコレサ此の急劇い處で爾う翻弄ずものとだらう詫まつたよ降參だよと何を云ふやら夢我夢中止め途も無しに饒舌り立られお時は何時も齒に衣きせぬ反面の多辨に似も遣らず藝調げかへりたる樣子にてモヂ〳〵雨手を揉合せ「モシ若且那何も那の娘ばかりが婦人と云ふ譯ではございますまい貴君の男前と御樣子の能い處に比較ると最と麗しくつて心掛けの良い者が他に幾干もございますす夫れに那の娘は少し惡い嘸さが有ますので密う他のをと思もひますが……「コレ〳〵老婆さんお前何を云ひなさるのだ他の者に爲る位ゆなら何でお前に頼むものか「ヂハでございませうが所に種々事情が有つて「事情も何も入るものか大方お前の骨折やうが惡いので又た斷られて來たのだらうモウ能い最う頼まない誰が莫老婆に頼むものかと顯に尊樂ほどの筋を呈はし厄鬼となつて我鳴る折しも聞いたモシ若且那貴君は私しを見限ッて拔苞けの功名を心掛け反

逃をお企圖なさるのでッラ斯う天罰覿面さ何と怖ろしいもので
げせうせと微酔ひ機嫌の高聲を先に怒がせノコ〳〵此方へ入來
たりしい孫て非内家へも出入する彼の骨董屋才兵衛なり禮三は
怒氣に堪へ得ぬ折柄とて才兵衛を見れと合釋もせず只だ苦笑ひ
を催すのみ所等の樣子を察してか才兵衛は勢ひ能く膝を進め
「全体何處の何者に尊慮を憑られたのか知ないが此の才兵衛へお
話しなされば直さま先方へ話しを付け否應云はさぬは請合の水
瓜自慢ではござらぬが已に此の程も去る若さまの御諚を受け近
來稀れな堀出し物小梅村百六十番地で然も近所評判の孝行娘を
生捕り念よ相談が極つたので今日は御本邸の方々が結納物取交
せや假親一件の御相談に付き當家へお越しの臨行役差し向き拙
者が橋渡しと云ふ譯でイヤモウ種々な御馳走さ「是れ一寸と待ち
なさいッテ其の娘は何と云ふ名であるか「若且那左樣なに怖ない
顏を爲すッちや不可ません小な聽が縮んで仕舞ひます所で其

の娘の名はエーお季さんと云ふのです「ナニお季……切はウヌ那
の娘を……ウヌ〳〵如何して呉れやうか「ア、若しい若且那何をな
さいます爾う胸倉を捻上ては息が詰つて堪りませんア、若しい
助けて呉れ〳〵……

第四回

「お季さんお目出度うァラお隠しなさいますなモウ悉皆り知つ
て居ますよ何時御祝言なさいます眞正にお羨やましいとチカ
季さん嘘ぞお嬉しうございませう爾うして那の方は華族さま元
つてね「お季さん貴嬢奥さまにお成なすッても妾達をお見限り爲
すッちや不可ませんよ能うございますかちよく〳〵遊びに上り
ますよと祝ふのやら憂の叶はぬ遺趣をも混ぜ銳と
き口啄を尖らして耳喧ましきまで饒舌り立つれと寄らず障らぬ
青柳のいと柔順に持なされ張合ひ拔し心地やしけん漸く饒舌り
くたびれて羽翼惑むる群雀すゝめ色時ならなくも打連れ立て歸

り行く逆葉娘の高慢しやくれ嵩しかりける次第なるか季は其の點を見返つて恥かしいやら嬉しいやら未だ戀知らぬ未通女の身にも初潮の紅葉色に出てホンノリさせし目の縁に云ふに云はれぬ笑みを帶び差俯向ける優姿常より一ト層艶やかなり其の艶妖なる面影が我が身の仇か僥倖せか過ぎ行く末は幸ざ知らず此の程虚りなく外方にて面合せし梅原等に思ひ悲なく思ひ初められ是非とも宿の花嫁にと等閑ならぬ手紙にて幾度となく請ひ出られ其の様如何にも禮儀厚く眞實面に見に透くのみか彼方は華族の若さまにてお齡に似合ず品行ひ正しく物學びにさへ勝けたまふと聞けば流石に惜からず又に捨がたき思ひはあれど相應はぬ縁しは不縁の基一時の出世に心惑ひ錦繍の袖に包みあへぬ後日の歎きを思はずば世の制虚ひになりもやせんと悔き胸に彫多度び思ひ返して告げ出るに時も同じく打點首き夫れ等の次第を云ひ立つゝ屢ば辞退に及びしかど彼方はつやく聞き入れず

素より浮たる色香を愛で一時の眺めに致さんとて斯くまで懇望するにあらず世に其の比類多からぬ娘御の孝心を深く感賞いたすに付け夫れを系圖とも寶とも思ふて結ぶ縁定め身分に高下の違ひありとも心に高下の無きものを何の似合ぬ事か有る可き今若し此方等が此の縁談を強て辞ひたまふ時は何事にも疑ら性なる若殿の御氣性とて明白に夫れとは云はれぬも世の形氣なく思召され遂に如何なる御病氣を惹起されんも測り難く申さば若殿のお性命を活すも殺すもお身方のお心一つに有る譯なり此所の道理を聞き分けて多少お心に染まずとも平に此の縁談を御承引下されよ斯くまで懇望申し入るゝも偽はか聽き容下さらずば拙者御母公方の御前へ對し何と言上の言葉ある可き餘儀なく家從の職を擲棄ち縣地へ隱遁いたせし上坊主になりて杜果なん然すれば若殿の御身のみか普代恩顧の拙者までが一生埋れ木と相成る譯人に難儀を懸けたまはゝ又たお身方の行末も最と氣遣ヒ

しき者ならずや彼れも好く是れも良く日出度う御思案を只だ幾重にも頼み入ると家従古橋三太夫が彼の骨董商才兵衛と共に袖を振つて説き立つるに左ほどまで云はるゝものを何は飽くまで辞はんは餘りに恐れ多き次第なり今は娘の心一ト つ如何やうにも致し候らへんと云はれて俄かに身じろむ處娘どゝろの跡や先か手は彼方が斯くまでも此の身を慕ひ玉はるかと思へば最と奚加なく染々嬉しさの身に染みて最早や辞ふ可き勇氣もなく只だ何事も母さまの仰せに背き候らはじと一ト言いふが精一杯赫らむ顔に袖を充て座にも得堪へず立ち去りしが愈よ夫れと相談まり今日結納の取交せと繰を定メの日柄も良く今朝から母に急き立てられて湯浴髪上げ薄化粧向ふ鏡の曇りあき心を寫す身だしなみ左りの小指へ密と塗てさす口紅の色も香も知る人ぞ知る我が實意やがて届きて迎れ毛の思もひをともにつげの櫛七重八重に元結の堅く契らん其の交情は露も洩らさぬ鬢水や毛筋道

はぬ妹と香の情け濃かく結き分けて何も假髪の紛れ毛なく只だ友白髪の末までも添ひ遂げなんを願ふのみと祝ふ心の籠に出て笑めば復た笑む鏡の面我が影ながら思はずも顔を赧める優らし き書にも描けざる風情なり時に後方の襖を開けて徐かに出來し時親か種は濃嫁好げに打微笑み「オヽ化粧りが出來たので一層麗くしくなりました時にモウ古橋さまがお出なさるとで有らう汚稜くとも座敷の方へお通し申す支度も濟ませ今迎ひに云ひ付てお菓子を買ひに遣りましたと我が子の又たなき立身を深く喜ぶこゝろ幾歳になつても髪ならなくかゝし気に飽へ座りて遣りながら「今更また改めて云ふ季が俯向む襟元の白班を執ひて遣りながら「今更また改めて云ふ迄も無きとなれど兎斯く婦人は萬事に付け心を優しく持が肝要良人を天と仰み崇め目下の者を慢れみ悪み身を謙遜り行儀を慎しみ別て舅姑の方々を分姻の親より義理深き思ある親と思ひ做し寝た間も忘れず孝行を心懸るが其の身の務め然れば とて折

合ひ好く中睦ましきに狎れ過ぎて早晩か其の身の元を忘れ仮りに心緩てなく無禮げな所爲をするならば流石に以前が賤しき者よ身分き成育であるものをと遂に端たなく輕蔑めた見他るゝにも至りなん此所に好く心して人に飽れず嫌はれず眞誠の和合を盡すやう心懸るが肝要なり扨て又た夫婦中睦ましく頓て嬰兒をも擧くるならば一ト層うの身の行儀を慎しみ我が兒の教育くれと心を添るが肝要ぞ永き内には思ひ依ぬ良人の無理も有るべけれど夫れに背かず逆らはず機嫌の直る折を俟ち言葉靜かに理を陳べて自然と心の和らぐやう眞實を盡して宥む可し殊に最も慎しむべきは悋氣嫉妬の擧動なり隠すとすれど色に出で顯れ易きものなれば萬が一にも左る念の我が胸に萌しなば何は扨て置き鏡に向ひ徐に面を照し見よ此の事呉れ〳〵も忘る可からず左は然りながら今日まで能く此の母に孝を盡し何一つとして不足の無い其方の事であるなれば何處へ行くとも氣遣ひなく心

易くはあるなれど好きが上にも好き樣にと思ふばかり、嘸言心らず惡う聞かれなやと嘸で含める數訓にお季は有難涙こぼれ何で其のお言葉を忘れる事がございませう一生胸に刻み付け心に留めて居りまする夫れに付ても今より後朝夕お側に居られぬが此の上もない我が身の悲しみ夫れが本意ならうございますと又た伏沈みて泣き入る孝を母は徐に撫摩り「遠い處へ行くでは無し何の本意ない事が有らう殊に道雄も居るとなれば夢々案じて下さるな其方の立身出世に付き那れも充分修業が出來行く〳〵立派になるは必定妾は夫れを樂しみに心快く暮しますオ、兎や斯う云ふうちに古橋さまが見えるで有らう目出度い折に泣くは不吉サア〳〵早く涙を治め一緒に此方へ來て下さいと勸ます言葉に勵まされてお季は漸々顔を直し母親とも〳〵所を出で常の居間へと入來る折しも輕み申すと音訪ふ聲音は聚て母子が聞き覺にある彼の古橋に紛れなければ今更嬉しさに胸悸ろかれ立つ居

うして彷徨く娘を母は流石に押退けつゝ自ら樣端へ走り出で「ア〳〵お登り下さいまし和樓らず汚穢い處で誠に無禮でございますと取次役やら主人やら主と家來を身一つにかねて用意を整へ置きし設けの席へと誘なへど古橋は如何にしたりけん何時に變る樣子にて何やらシロ〳〵四邊を見廻し態と虛敷へも登らず樣先に屢を据ゑ「イヤモウ決してお構ひなさるな扱て今日上つたは……」「オホ、、如何にお急ぎでも所では御挨拶が出來兼ねます万望此方へお登り下さい」「イヤイヤ陽うしては居られぬのぢや扱て……」「ではございませうが是非此方へ登つてお話しを致すも迄もございらぬ實は今日結納物持參の儀を聟てお約束申して置いたが急に差支にの次第出來に及び何分うの運びに至られぬお斷りの爲め斯く參つた譯でござる且つ結納取交せ前を幸ひ都合に依り此の縁談は一ト先づお斷り申し入れる孰れ橋渡し才兵衛を以て委細お話しに及ぶでござらう是れまで拙者中間に立ち種々

靈力いたした廉もあれば取り敢ずお斷りに參つたので有る方お心得下さい是れにて拙者の役目は濟だ以後關係はござらぬと先に愛へ頼を招り付け泣ぬばかりに頼み聞にし其の樣子には打て變り樣もほろゝの意氣組みにて自己が云ふ可き事だけを委細捕はず云ひ放ち跡は野となれ山彦のドラ聲高く當り散し果れて袖を引留むるお種の手先を振拂ひ急々に所を立上り見返りもせず出で行く昨日に變りし其風情最と不審しき事なりけりお種は斯る意外に付き夢かとばかり呆れしが再び古橋を引留むる力もなく茫然り詰めて太息つく夫れにも增せるお季の悲像昨日までが夢なりしか又た只今のが夢なるか我が身で我が身を分け難く只だ諦袖にふり頻る涙の露のみうつせ身の選らん方なき物思ひァ、此の末如何になる可きか最も哀れに見にたりけり

第五回

定めなき驛の中に數へられたる秋の空誰が袖濡らす種とやなら

ん日暮れて未だ程なきも空合あしさを氣に持ちてか往來の人足絶に勝ちある立川筋の横町を自己等のみ最と沈着き顔にフラフラ來かゝる三人連れあり執れも微醉ひの上機嫌よろめく足下危なげなるが中にも小楊枝を前齒で噛み締めながら折々胸を前へ突出しオホンと澄し込む痴漢は夜目にも香水の匂ひに著き彼の氣除通人井内禮三にて又た开が左右に隨へるは例の江口才兵衛と口入れ老婆ふ時の兩人なりき枕橋の八百松あたりにて滋味もつくめの馳走に酒ひ酔ひた腹を膨らせたれを飼は夫れにても嬰き足らぬか他人の分まで折に詰めさせ攫んで放さぬ强慾老婆ふ時は才兵衛に先立てズン〳〵右手の小路へ曲るに此方は慌て跡より〳〵オイ〳〵ふ時婆爾う無暗に其地の方へ行たら肝腎な手紙が狂ふだらう是れさ是れから大事な處だ戯談ぢや無い確り頼む上「ナカ、、、カダカヲ才兵衛さん爾う何も妾を輕蔑つて老婆呼はりを云ないでも宜らう若且那の前で此樣な事を云ふと可笑

いが是でも若い時分にはヘン黄鳥鳴したこーともあーるッ「アハ、、、ハ往來中を踊を跳るとは如何でも惚けた老婆さんだ序でに小桶で茶を飲で見せなさい「能いよ何とでも云ふが能いのさチエ若且那此の間植半の座敷で貴君が公債證書を遣ると仰やッたら直に裏切りをして此方の味方になつたハ能いが如何して向ふの繼談を變更させたものだらうと青い息を吻いても思案が出ない ので妾が欲面しく先方の座敷へ暴れて行き苦い顔をして居た三太夫とか云ふ老爺さんに向ひ種々否味を並べた爲め遂々向ふを破談にさせ其のお蔭で愈よ此所まで通り付けたところ自只一人の骨折でゃも有るやうに妾を踏付けにするのは餘まり憎いぢやございませんかダカラ妾しハ……「ゃ一寸と佚ちなさい私の心も知らず無いで二人とも好い氣になり内輪喧嘩なぞをするとは眞に情け無いと云ふものだ夫れはナル程お前達の骨折りで向ふの繼組だけは破談にさせたが未だ此方との相談は如何なるのか知れ

いのだらう此所が肝要めのところだコレサ笑ひ事ぢや無い御を此様な窓しいところへ連れ込み是れから如何する積りなのだと氣色を變へて詰り懲られ二人は御機嫌を損ねましと俄かに遣る瓦斯ひ窓々しきまで口を揃へ若旦那御立腹爲すッちや不可ません細工は流々仕上げを御覽じろさ今既斯う此所へ御出馬を願つたのは爲々お時女將軍の方寸に有るとで今少しの間御辛抱をなさるとッテ是れは〳〵とバかりさ能うげスかよし野山花にも增す花い眺めかなナンと檜林風の御感吟を禁る譯でへッへ、、、「夫れぢや何かチ此所に斯う待つて居るとアノ娘が偶然り此所へ遣つて來ると云ふ約束でも爲て有るのか子「若旦那先刻お話し申したぢや有りませんかアラ不可ないモウ忘れて仕舞ッてさ能くお聞き爲すッて欲して下さい此い間からお話し申す通りアノ娘のお爺は頑固で無慾く實に仕方の無い奴ですが那い娘は貴君を見覺にて居るので內々御立つ程遣んで居ますのさ」オッ

ホン成る〳〵夫れから……「所で寧そ直接掛合の方が宜らうと思ふ今日邪の娘が花川戸の問屋へ行く日取りなのを知つて居ますゆゑ此所で其の帰途を俟ち受け妾が横合ひから飛び出してオヤお季さんッアお待ちなさいと無理に呼び留めて二ッ三ッ話しを仕て居る所へ貴君が出て入らッしやる「ナル〳〵實に感服だ……「所で貴君が其のお麗しい男ぶりを借々見せた上か季さん如何です其所等で一ト口遣らうぢや有りませんかと仰しやるのですから二ッ返事で直と今「ナル〳〵夫から……「向ふも根底嬉しいのだから妾は又た遽り飲み直してや先への八百松へ引遣す才兵衛さんと云ふ譯なのですが何と旨い趣向ぢやる跡はお二人が對座ひを云ふ感服だ日所で夫から……「ハアハ、ございませんか「ナ、成ール實に、夫から先へ新聞や小說本に有る……と云ふ譯でげせう其の又た先へ目出度し〳〵と極つて居やせう何にしても好男子は遣つたものさコン畜生め……「アア痛タ、、突然けに脇中を擲るでは酷い

兵衛だオット向ふから誰れか來たやうだぞ此所に居ちや不味からうサア〳〵皆な隠れなさいと狂ふ心の駒下駄を踏み返しつゝ跛足引き一同物蔭へと立匿れぬ此所に我が身の仇となる人の陰らふ事とも知らずお季は今日も何時もの通り花川戸の問屋にて仕事の賃を受け收め倘は頼まれ事の用向にて少し時刻を移せしかゞ母や弟の待ち詫なんと急々此所まで歸り來たり頻りに歩行みを進むれど良なき事を思ふに付け遅れ勝なる心の憂ひ悠しい此の程彼の人に逢もせず見られもせず素より望まぬ玉の輿乘う地の話しを聞かざりせば斯く迄物へ思はじを況て善惡なき世間の人心隠てぬ友にまで那れよ是れよと後方指さすがに口惜しく恥かしく面見らるゝ心地はすれど我が身一個の故ならば耐へも堪ひも忍びもせう唯だ那れ程まで喜ばれし母や弟の心中を思へば此の頃打續き泣て明さぬ夜半もなし愚痴なと自から勵ましても思ひ初めたる煩惱の疎恨てや吾が身を離れぬは如何なる前世の

因縁かア、形きなき身の上よと流石が乙女の胸狭く保ち兼たる愛き事を絶にす意に繋迄せば自然と足の進みも鈍く情々迫る其の体を小蔭に潜みて見沿し居たるお時へモウ能き頃と思ひ矢庭に所を立出ながら「モシ〳〵お季さん一寸とお待ちな能い話しが有るんだよエナニお母さんが待て居る早く〳〵らなくッちや不可ないとホ、、、ホ嬰見ぢやあるまいし左様なにお母さんを戀しがらなくッても好いだらうお前のお母さんも最う少し聞けて呉れるとお前に身緒なんぞを繼せずと氣樂に暮して行るのだが那ア頑固ぢや仕方が無いのさダカラキ妾はお前が可愛想で堪らないのだよ萬望早く立派に身分の極る樣にと夫れで蔭ながら極々心配して上るのさと遺虚げも無く反歯を剝き出し他人の大切な愛娘を自己が喰ひ物になさんものと聞して憑る狼老婆うの聲さまも凄く吠へらしくアッと驚嘆を含むなる可し時に才兵衛は井内を急き立てノッ〳〵小蔭を出來たり是非とも此の機會を以て

常人同志を親密かせ猥て約束を堅め置きたる額面三百圓の公債證書を骨折賃に貰はんものと慾心一方の頭を振りつゝ「イヨーい季さん先日は誠とに失敬をいたしましたアノ事に付ては嘸ぞ御立腹で有りませうが那れは全たく先方の奴が惡いのです私くしをお怨み爲すッちや不可ません其の代り那の埋合せにチッレ斯う云ふ好男子をお目に懸けますのさオット最うお知己の筈で有つた眉間に黒子はなくとも何處かに見覚えが有りますだらうナニ未遇たとは無……などゝ嬌羞んで四谷で初て逢つた時と云譯なんでせうゝィ是はシタリ若且那までが一緒になつて何故跡の方へお退りなさるサア〳〵此方へお出なさいと無理に前面に引出され井内は平生高慢を並べる口はどにもなく只だヤシ〳〵と頭を垂れ「エー何時も御様嫌で……今晩は誠に何で……と何を云ふやら分け難きに二人は一層氣を焦ち「お季さん切角若且那が那ア仰やるのだ何處かで一ト口遇つて行かうぢや有りませんかナニお

手間は取らせない若去遇くなつたら拙が送つて上げますのさ」遠つてお呉なさいナと引退きさせず云ひ遁られお季は口惜く腹立しけれど流石に端たなくも斷り兼ねしが只だ品よく云ひ辷らし一ト足先へ行き過んと彼方に揃はぬ急ぎ足うれと知つてお時等も眼路きながら歩行みを早め「コレサお季さん左様なに驅け出さなくッても能いだらう何も妾達がお前を取て喰ふと云ふのぢや無いよ一ト口交際ふのが否なら如何せ妾達も那方へ歸るのだわ子近所まで送つて行て上やうダカラ綏くりお歩行きなと袂を捉へて留むるうち禮三は才兵衛に教唆かされ切て此の機を空しくせず握手の禮だけをも施てさんとお季の側へ寄り添ふ間もなく左右に四五本街燈の立並べる西町の方へ出來ければお季は少し胸を安んじ初めて彼の禮三が我が側に居るを知りうゝ髪立てつゝ窺く途端向ふなる横町よりの間遇頭に端なくお季と顔を見合

せ是れはと逐巡ふ男あり陰なき街燈の光に透し疾く其の人を打見るに時も時折も折是れなん梅原醫にて今何處へか往んとて斯く來かゝりしものなりけりァ、此の時か季の心中は如何に恥かしく有りたるやらん再び顏さへ擡げ得ず小蔭の方へと身を背向けぬ才兵衛も是れと同時に同じく驚と驚見合せ「ヤ若樣でございましたな此奴は失錯た梅原〳〵ドッコイ桑原〳〵ァ、惡いた……

第六回

只ださへうら悲しき心地せらるゝは梧桐の一ト葉に驚かさるゝ秋深き頃の常なるに況て果取なき憂身の果絕ねぬ思ひに結ぼるゝ母子が上や如何なる可きか季の夜兎角して我が家へ歸りし後フト重き扉に撞り奥の一ト間へ臥したる僅な二三日來も遣らず容体益す甚しからぬに母の驚き道雄の悲しみ何に比喩へん樣もなく偖かに根笹刺茶と云ふ淡法醫を花川戸なる彼の問屋に頼み見舞ひて貰ふとになし手厚く診察を受たれど名

からして如何やら壓束なき小竹老の同門醫生臺三片煎用如常と勿体だけをお負にして其の實葛根湯を調合する位ゐな腕前にて却々遲付く可き容体にあらず日に〳〵衰るゝ面影を見る母親の心は暗み同じ思ひの弟道雄常は何事にも元氣よい母や姉の苦勞を慰さめ一人活々しく立働らくに昨日今日は三度の飯も拙々しくは進まぬまで力なく凋萎かへり眼さへ有れば人知れず顏を背向けて酸鼻む幼稚ごゝろの可憐しさ是れも和睦よき姉お季を深く氣遣ふ故なる可し「道やお前姉さんの處へ行て少し足を摩つてお上げな妾は是れから根笹さまのお宅まで行て來ます日の暮れない內に歸つて來る積りだが若し姉さんがお粥をと云つたら那所の枕邊に出來て居ます那れを分配つて上げるのだよと奥より徐々く出來ながら沾み眉にて命ずるお種道雄も同じ・壁を濕らせ「お母さん樂劑取りなら僕が行て來ますよ慈母は昨夜の胸痛が未だ癒ら無いんでせう無理なことをして若し……若し慈母までが

……と彼は云ひ得ず鼻を詰まらす其の心根を察するも種胸も張り裂く心地はすれど吾が身が此所にて氣を挫き泣き飲見すると もあらば一層苦勞を增さすると譯と思ひ返すも子を思ふ世に有難さ親の慈悲溢るゝ涙見せまじと目叩きに紛らして漸う無理に笑顏を造り「ホヽヽヽ妾の胸痛い持病なのだもの少しも心配するには及ばないよ夫れに今日い是非先生にお目に懸つた上種々伺ひ度いことが有るので妾が行なくッちや不可ませんお前は其の間姉さんの側に居て何か面白い話しを聞かせ氣の引立つ樣に爲て居て下さいと元氣の体を面に見せ手早く火鉢の抽斗より取出したる藥紙是れぞ我が娘の身に懸る思ひ掛けなき染袋紙渋き緞子で有るをかと引けば破るゝ袋紙より薄き人情の頼み難きが常とは言へ那の時良しなき彼の人の頼みを飽まで聞き容れずば變更さるゝともなく斯る歎きも有るまじを夫れか有らぬかお季の容体察し遣るさへ痛ましと思ふ心を押包む風呂敷包み前垂れ懸け見る影も無き老の身の子故に迷ふ裏手路見返り勝ちに我が家を立出で根笹方へと急ぎ行きぬ母の出行く後方影見にずなるまで見送りながら頓てシク〳〵泣き崩す道雄招り赤めたる目の縁に傳ふ雫を拭ひもやらず下口唇を佶と噛み縮め壁を見詰めて居たりしが奥にてお季が苦し氣に咳き入る聲音を夫れと聞き付け漸々心を鎮ませしか其の儘ま勝手許へ辿り行きて清潔いに涙の顏を洗ひ常の元氣好き体を造り板樣を踏む足音も態と暴やかに勢ひよく衝々奥の一ト間へ入り姉さんお湯を上げやうか咳が出るなら其地の方へ廻つて脊後を叩いて上げやうエ此所は係は無いでも能い御書籍を復習と云ふのかニナアニ書籍なんぞは復習なくッても能いヨ早く姉さんの病氣が快くなると分からない處ろを教へて貰ひ今までの百倍增しに勉强すれば此の次きの試驗にも飽度亦た及第して見せるのさダカラ姉さん早く快氣なつてお呉んなさいよ僕い姉さんが病氣で居ると書籍を讀んでも字が

……見ねなくなつて……悲しくつて〻時は口唇を噛ひ締め眉みを見詰めて言葉なしふすゑは少し身を擡げジット道雄を見詰めろのみなしく雪し言葉ハなくてホロリと落す一ト雫無量の思ひや籠るならんァ、果敢なきもの浮世かなお季の病氣いまだ一二週の上を過ぎざるも花顏已でに褪れて落英空しく妬雨を怨み月姿稍やく衰へて痴雲徒らに餘光を覆ひぬ昨日まで清く愛らしく見られたる、兩眼も險凹みて絶間なき涙の露を湛へ、常に嬌着を帶び て光輝かなりし口許も白ひ失せて愁色を合み翠みなき狀態なり兎角するうち道雄は右手の方へ廻り「サァ背後を摩るンだよ餘り酷く無い方が能いだらう」してチ姉さん精神を活潑に持て居なくッちゃ不可ないよ病氣なンぞに負るのは此方が弱いからだ病氣ばかりぢや無い此間お母さんや姉さんを欺騙して眤を掻させた奴が有るだらう那奴は非族だと云ふのを鼻に懸け此方を輕蔑つて居るのが非族だッて何だッて指ふものか俺は今に學校

を卒業した上立派な法學士になつて乾度響く取つて遣るよとお季の意中を察してか充分活潑らしき体を見せ未だ未練き身の上の望み事をさへ語り出で威勢を付くる同胞思ひか季は彼の事を云ひ出られ窘れ果たる我が顏に覺にす紅葉を散せしが動氣脂しき胸を鎭めて徐やかに道雄を打ち見遣り「道ちやんお前さんが爾うして妾しのことを種々思つてお呉れのは誠に嬉しいよダがチ詰ら無い事を云つて人さまをお怨み申すものぢや有りません何事も時世時節と諦めを付けるのが肝腎です……ア苦しい其のお湯を一ト口下さい」姉さん氣を慥り持てお呉れよサァお湯熱ければ最と微温いのを上やうか「イ、エ怡ど此位が良いのですと戴へる手先を差延べて緣の缺たる湯呑器を取上げ一ト口飲みてホット一ト息」道ちやんお母さんは如何なすッたノ何處かへお出なさつたのかエ「ア、今お醫者さまの處へ行たのだよ先生に遇て種々な事を聞いた上モット良い藥劑を貰て來て早く姉さんの病氣を全

快す樣にするんだよダカラドン〳〵藥劑を服で早く快くなつて
お呉なさいオ、是は先刻僕が持て來たお藥劑だ大變冷て仕舞た
が少し温ためて來やうか子「マ最う些と後刻にしませう道ちやん
お母さんは昨夕か胸の痛いのを妾に隠して在しつたが餘程か惡
いのぢや有まいかお前さんは好く御樣子を知てお在だらう「ナニ
何だよ直に全快つて仕舞つたのさ心配しなくッても能いのだよ
と姉の心を安むる爲め然もなき体に云ひ紛らせど夫れと察する
か季の胸中吾が身無事にて居る時すら何彼に付けて不自由多く
足らぬ勝にて有るものを藥劑の何のと思ひ依らぬ費用の嵩む今
日此の頃夫れを只だ御身一個に引き受けらるゝ母のお心如何ば
かりにて有る可きか思ひ遣るさへお痛はしく殊に常より持病の
胸痛嵩て日數を經ならば迫々強く差重り頼り寡い弟道雄の如何
せん方も泣き暮す悲しき事にも至らんか夫や是やを考へれば喰
ひ付てなりと病氣を直し一日も早く母弟の手助けになりなんも

のと絶に心を勵ませど思ふに任せぬ身體の疲勞兎ても斯ても
運拙き吾身故に何時迄も母に苦勞を懸け申すは却つて思はぬ不
孝と云ふもの定まる宿世の約束にて所詮助からぬ吾が身ならば
片時も早く此の世を去り切なきお胸を休ませたやと果敢なき事
を思ふ程心も消入る切なさ苦しさ我れ知らず重き頭を垂れ膝を
見詰て居たりしが頓て又た面を擡げ「道ちやんお前さんは平の行
ないのに似合ず能くお母さんを大事にしてお上なさるが他に少
しも便りの無いお母さんのお身を思ひ此の末とも何卒ぞ能く孝
行にして上てくださいよお前さんが學藥を仕上げ立派にお成な
さるのをお母さんが御覽なすッたら如何なにお喜びなさるだら
う夫れを妾も……樂しみにして……」姉さん……何故ッ樣な事を云
ふんだよ……お前が氣の弱い事を云と僕ハ……僕ハ何だか……何でも
チ活潑心を持なくッちや不可無病氣何ぞに負て居て鬼り事が有
もンか活潑な精神は衰弱した身體を捨すと此の間も話したぢや

無いか何の貧病神なんぞ……と口には強く力身で見ても泣き腫したる目を背向け歯を喰ひ締る可憐しさ、お季は其の体を見て堪へ兼ねしや何時しか細く痩果し臂を少し差延べて道雄の手首をッメ握り「道ちやんお前泣いてお在のかエ妾が詰らない事を云つたので若し何かお前さんの氣に障つたのなら何卒堪忍してお呉んなさいよ」「僕は何で泣くものか……泣てなんぞ居るッぢや無いよ」と云へども最早や堪へ難ねけん思はず洩らす泣く音と共にお季の胸へ伏し轉び身を搖すらする歔欷きいづれ劣らぬ同胞が斯くまで睦み合ひながら慮らぬ浮世の災禍にかゝる憂身の涙雨片彷彿に立し屏風の墨絵風を痛める芭蕉葉の脆きにも増す身の上や秋の哀れを此所にのみ移し止たる母子同胞憐しかりける次第なり時に母親お種は何時の間にか歸り來しと見に破れ襖の似方にて溜り勝なる咳吹きの響きゴホン〳〵

第七回

天に口なし人を以て云はしむるとはズイと迂遠い往昔の俚諺今は之れを唯だ一と口に輿論と云つて濟ませる素早い世界西の果から東の果すみ〳〵隈々迄らぬ方なく裏店の輿論遂に差配人の耳朗顔をヘコますれば小娘の輿論いつも禰チャンの噂さに歸す其の勢力廣大無邊善悪の依て分るゝ處なる可し「アラお秋さん何故默止つてお出なさるの酷いぢや有りませんかお夏さんも一緒にさ……」「オヤお春さん突然に吃驚しますよ大きな聲を出すのだもの夫れに妾達ゝ大變急いで來たので阿女の方を少しも見ずに居ましたのさ」「オヤ爾う夫れにしても左樣なに急いで何處へ行く積りなの何處へ行くつて阿女の處へ行きますのさ」「ホヽヽヽ否なお秋さんだ人をはぐらかすのだもの夫れとも何ぞ用が有るノ又昨日話して置た新富座の事でせう」「如何して〳〵夫れ處の騒ぢや無いのチエお夏ちやん眞實に大變な騒なのチ」「左樣なら早くお話しなさいな人を玩弄すものぢや有りませんよダッテ妾が話さう

と思つて居るうち阿女が新富座の事なんぞを云ふのでッイ話す間が無いのだもの「アチレッタイ左様なとを云て居る内早く話してか仕舞なさいな「左様急立たつて不可ませんッア能く氣を沈着けてか聞きなさい此の間梅原さんの處へか嫁に行く相談が極つて間もなく又た破談になつた山邊のお季さんヲ那の後程なく大病に罹り今日等はモウ九死一生の容体ですと可愛想ぢや有りませんか「オヤ〳〵夫れが大變なお話しなノお季さんの死に悪つて居ることは今阿女に聞かずとも疾から知つて居ますのさ全体お季さんは優なしさうな顔をして居ながら那れで井内とか云ふ人を且那に取て居たのです夫れが梅原さんの方へ知れたのでッラ破談にされたのですワ云はゝ自業自得とやらゆゑ別段可愛さうがるにも及びますまい「アラ阿女は此方の話しを仕舞ひまで聞ずに無暗とお先走んなさるから不可ませんッア辛抱してお聞きなさい妾も祝めの内は阿女のお云ひなさる通りだと思つて居ましたが那れは皆なお時老婆の拵造へ事でソノ非内とか云ふ氣風な奴が何處かでお季さんの嫁致を見初め是非權妻に仕度いとお時老婆へ御み込んだ處モウ梅原さんの方の相談が出來かけて居るものだから夫れを變更させやうと思ひ有りもせぬ事を吹聽けて遂々破談にさせたのですとさ「オヤ爾う夫れぢやお季さんが力を落したのも無理は無いのヲ「夫れで落胆したものだから可愛さうに那樣な大病に罹つたのですが夫れを心配するお母さんや道雄さんの泣顔を見ると妾ハ胸が一ぱいになつて郎處の前を如何しても通る事が出きないのダカラ阿女やお爺さんに相談して何かお見舞物を贈うと思ひますのさ「爾う聞いてハ妾も打捨つて置けない是非何かお見舞を贈るとにしやう夫れにしても惜らしいのはアノお時老婆だが過査さんに爾う云つて如何かして貰ふ事ハ出來ますまいか「オヽッイ忘れて居て赤だお秋さんにも話さなかつたが妾の宅と那奴の處とハ僅か五六軒しか離れて居ないので

今朝も大騒ぎを遣たのです夫はチ那奴が此の頃ソノ非内と云ふ紙障な奴から澤山お小遣ひを貰ふので斯う云ふ時節ハ又たと來ない何でも澤山飲み食を仕て置くが能いッて毎日浴る程にお酒を飲んだり酢蛸と天麩羅とをチャンポンに喰たり滅茶苦茶なことをしたので遂々逗留の コレラ病に取付かれ今日遊病院へ送られたのだがお季さんの代りに那奴が死で仕舞ふと極部合が好いのチ其の話しを聞いて少し胸が透ましたお互ひに是れ迄アノ一件でお季さんの事を悪く云つて居ましたが元々中の好いお友達の事でもあれば早く御見舞ひにも行き何卒助かる樣に看病をして上やうぢや有りませんか「お秋さんが其のお心なら妾ハ家のお母さんにも話し充分力を添へて貰ふ樣にします何しろ是れからお冬さんの處へ行き那の方へも能くお話しをする方が好いでせう」私も其の積りなのです夫れぢや直ぐ御一緒に參りませうと偖には脫き娘同志是れもお季が常日頃表裏なく交はりし眞心厚き

親ごゝなる可し時に娘達の後方に佇み立み熱心なる樣子にて始終の樣子を立聞き居るは是れなん彼の道雄なりける昨日今日お季の容体危篤に迫り所詮助かる可くも見にざるより今ハ唯だ神佛に新盤を凝し其の應護を願ふより外なしと幼稚ごゝろに思ひ詰め今日も程近からぬ牛頭天王の社殿へ赴き必至と新願を籠めし後先に此の邊まで歸り來たり何心なく歩行むうちフトお季と云ふ聲の我が耳に響きしかば如何なる次第を訪ふにやと聊か不審しく思ひつゝ其の儘ま物陰の方に佇立み即ちお秋等の話す處を洩れなく聞き取るには至りしなり道雄は始終を聞くや否や扨は其の井内と云ふ奴ところ我が姉の懇なるかと拳を固めて怒り立しが何にもせよ早く我が家へ立歸りて委く姉に語り聞け氣力を添るに如くはなしと思ひ込み何時の程よりか孔片傍に一人の老人が佇立居るを心付く暫もなく高さまに衝突りて痛く右手へ逃巡しかゞ更に顧着する處なく一目散に馳出し何處を如何歩

しともなく頓て我家の前へと來りぬ此時入口の戸外をウロ〳〵彷徨居る一個の男あり今辺が内へ入らんとするを見て慌忙く側へ馳せ寄り先づ其の袂を引留めたるが此の男は似の井内三にてお李が病氣に罹りしと聞き大方自己の事を思ひ詰たる様煩らひにて有るなん可愛のものや可憐やと何處迄も際限なき自己惚れ黏に浮し立られ是ぞ乃ちの病床へ臨まんとて日々才兵衛お時等をせがむうち才兵衛は不正品買の伴に付き此の君を警察署へ拘引せられお時は又たコレラ病にて十万億土に程遠からぬ避病院へ送り込よれ今は禮二唯た一人り糸目の切れた奴風腕を組でう退付かざれど何は自己惚れの熱度冷め遂らず寧う直接に尋ねて行き自己の顔を見せるのがお醫者さんでも有馬の湯でも癒らぬ病氣に無類の良薬斯うして居るべき處にあらずと氣付の悪い思ひ出し笑ひを噛み殺し遂りすがりの人達が若し色發狂にはあらざるかとチロ〳〵見返るをも頓着せず今漸う此所へ來た

り道雄をお李の舍弟なりと大方ならず察せしかバ扨て突然に走り寄り斯やうに袂を引留めたるなり道雄は心急立つ餘り能くも彼方の顔を見遣らず「何をするンだ袂を引張つちや不可ない急用が有るのだ早やく所を放して下さいと身體を搖動かして急込み懇れど滿々たる自己惚心一方のみ他事には無頓着無感覺なる井内禮三斯やうに急劇き場合ひにても何は優々と奇な呼拂ひを打ち擊かせ「オッホンで待たへ君いお李さんの弟だらうナル程爭そはれぬもので目付きの可愛らしい處なぞは全で瓜を二段と來て居るオホン如何も堪へられ無い「君君は何を云ふのだ急ぐから此所を放して呉ろと頼んで居るのに……「マサ左樣なに急がなくつても能しいはヲ君は姉さんの病氣を心配してワク〳〵急込むのだらうが安心し玉へ最う大丈夫だよ私が姉さんに一ト目顔を見せさへすれば直と全快するのは請合さお醫者さんでも有馬の湯でも……「ア不可ない全で發狂人を見る樣だ君左樣な分らぬ事を

云ハ無いで用が有るなら早く云ひたまへ一体君は何處の人だ「オホン發狂人にもなるだらうさ懇頃らひをされて居るのだものヤニ早く名を云つて聞かせろホヽ、*名なんぞ云はなくつても姉さんの處へ往て業平を見るやうな麗しい殿御が来たと云へば直に分りまス待て居るに違ひ無い「馬鹿ッ……念よ君ハ發狂人だらう夫れでなくば早く名を云ひなさい名も云はないで誰れが取次きするものか「仕方が無い左様なら名乗ませうアノ井内禮三がお見舞に來たと云つて下さい「ナニ井内……ウヌウヌが井内姉さんの……此奴め此の畜生めと今方委しく様子を聞き知りたる矢先なれば怒の勢ひ一ト層烈しく入口の片傍に立懸けあるし太き心張棒を押とりさま續け打に撲て懲れば井内爭で懲かざらン「ア痛タヽ、是れは酷いボカ〳〵撲り……目あら火が出る……痛い〳〵と慌忙てふためきて逃げ出す途端の片傍に寢て居たる白の無垢犬驚て狂犬の愛撫を受けるに付き斯る馬鹿が勇氣を振ひ

起して飼主の恩を報はんものと思へるか太く逞ましき胴中へ立せ鋭どき牙齒を剥き出しポウと一聲猛り立ちさま井内を目掛けて直驀らに馳け來たり吐噓や飛びかゝらんとする權幕に素より活地なき井内禮三前へ進めば道雄に撲られ跡へ退れば猛犬にいがみ懸られ進退谷まりたる苦しみ一生悪命の泣聲にて「アヽ……噛付く……痛い……堪らぬ助けて呉れ〳〵

第八回

「たとへをしるも數ならぬ身には及ばぬなれ共妹背の道は隔なき波漢王の其むかし甘泉殿のよるの思ひたらぬ心や胸の火の煙に殘る面影も見しはゞとなき哀の色中〳〵成し契りかな……と謠曲なる「小督」中の一節を小殿にて繰返し唱て又たアヽと力なき溜を發しさま苦なる机に雨臂を凭せ寢るともなく寢るともなく現なき人と成り果しゝ是れなんぞ彼の源原常が一人我が居間の内に在りて書しも今も人の身の兎に角思ふに任せぬを心ひとつに

感概し扨て斯く思ひ惱めるなりき蓉はか季が母親へ良く仕へるとの噂さを聞き一ト層うの人品惹はしく浮きたる戀にはあらず「して眞實彼れを思ひ初め己に才兵衛等の手結きにて結納物を取交す期日にまで迫りし處か季の上身良らぬ旨打て變りし才兵衛の意外なる注進を蓉の兄君たる梅原家の當戸主勇助氏が聞込まれ左る身上良らぬ者を爭で嫁にせらる可きや早々破談に及べしと厳しき言葉の効驗は銳く忽ち破談に至りしかば蓉の失望云はんかなく唯々として在りけるうち前夜彼の西町にてお季が絶妙かしき男と共に歩行み居たる体を見懸け扨は心に點首しが倘半信半疑の廉や有りけん老僕眞助に意中を告て密に彼方の様子を探らせ頼み難き人の心を覺束なくも頼みつゝ形きなき日を送り來りぬ斯くて蓉い今しも何者に魔へれしか俄然雨の眼目を暗開き頻りと四邊を見廻せど更に人の影だもなく唯交趾銅の四香爐より糸の如く立登る香烟幽に見ゆるのみ他に物の響さへ聞

にざれば思ずホット太息を吐て再び頭を垂下れ居たり時に徐々夜を逸から歸つて來た松野と云ふ藩士だが久しく那方に行て居たから日本の料理より矢張り西洋料理の方を喜ぶだらう其の積りで何處ぞへ爾う云て遣るが能い「何時頃からお出でございませうか「左様さの日暮前と云つて居つたでモウ程あく來るかも知れん夫れでは眞助が歸つて參りましたら直に爾う申し付けて遣りませうと舉動も總て優やかに所表の旨を畏まり頼て次へと退で行きぬ引違へて慌ゝしく此所へ入り來るは例の老僕眞助なり額の音汗を拭ひ〳〵所へ跪座く程もなく「若さま殘念でございませう可愛さうな事をいたしました……私しはモウ胸が一杯になつて

張裂く樣な心持がいたしますと何やら譯をも云ひ聞けずみロリ〳〵泣き出すに驚は稻や果れ果て「眞助如何したのだ大きな姿をして小兒見るやうにメソ〳〵泣く奴が有るものか氣を落着て早く其の譯を話しなさい」「ダッテ若さは實に可愛さうでございますと涙脆きが老の常眞助は尙はメソ〳〵泣きながら漸う少し膝を進め此の程內意を受けたに付きお季方の內情を夫れとはなく搜り尋ね且つ世間の噂さ等に聞き耳立て居た處最前お季の友達なる小娘等が寄集まり頻りに語らふ次第を聞けば斯やう〳〵云々にて全く才兵衛等が利慾に迷ひ此方を破談させん爲め跡方もなき事を云ひ觸し氣の毒にもお季の身へ汚名を被せた事と知れしに付き尙は能く其實址を極めん爲め直さまお季かたへ到りし處怡ど才兵衛等に欺むかれし井內と云ふ馬鹿者が鉄面皮しくも尋ね來たりお季の弟、道雄と口論に及び末犬の爲めに噛み付かれ獄ケ所へ傷を負し騷ぎに巡査の出張されし折柄にて先夜西町の

邊りにお季を待ち受け無理に同行せんとしたるも皆な同人の所爲にて傷を負ひたる苦し紛れか巡査の尋問せぬ事まで逐一饒舌り立るに至りしかばお季の身に取り一點の曇り霞みなき事忽ち明白に顯はれたれど不敏や夫れ等の心配が身に障り今は旦夕も知れぬ大病にて母や弟の悲しむ体目も當られぬ次第なりと委しく樣子を語りながら尙は又た常理にて涙を拭ひ「如何でございます若さは實に氣の毒な者ぢやございませんか所で母親の申しますには一旦御緣があつて那れ程に迄仰やつて下さつた中若しの息のあるうち一ト目なりとも若さまのお目に懸りましたら娘は嗚ぞ喜ぶをでございませう併し斯やうな汚穢ところ故迎もお越しを願ふ譯には行きますまいとオイ〳〵泣きながら申しますのでイヤお情け深い若さまの御氣質私しが委しいお話を申し上たら屹度お越しになるだらう是非お伴をして參ると母親や舍弟を慰さめて置き直に大急ぎで歸りましたが如何でございませう往

てお遣りなさる譯には參りますまいかと深切一圖の老人氣質我が娘にても有る樣に言葉を盡して云ひ出づれば碧は驚きと悲しみとにて心中亂麻の如くなりけん茫然として眞助の顏を見詰め暫時言葉も出さいりしが頓て屹度立上り「眞助直に案内しろ是れで能い此の儘で早く行かう……「若さま誠とにお有難うございますす私しも夫れで何れ程嬉しいか知れませんサ御案内致しませうと先に立て玄關へ立出で侍女お政が後方より何か云ひ懇るを二人とも更に聞き容る体もなくズン〳〵門外へ馳け出し頓て程遠からぬお季かたへと到りけるが案内を乞ふ間も煩しく思へるに や眞助を先に立て急々奥の間へと打通りぬ此の時奥にはお種道雄の兩人がお季の枕邊を取圍み泣き腫したる眼の内にあふるゝ涙を拭ひも遣らず最早や頼みの綱も斷れ果敢なくならん其の際を打護るのみの樣子にて息さへ吻かず居たりしが聲の所へ來たるを見て母は流石に心婚しく「オ、眞助どの……若さま能う入

して下さいました……クッタ一ト目……只た一ト目逢てお遣り下さいまし……「御老母實に御心中を察します是れと云ふも全く手前方の不注意より起つたと何とも殘念な次第であります と云ふ内も早や保ち切れぬ至情の涙はら〳〵〳〵其の中にても馨が情けある樣子を見遣り心に頼母しく思ひけん道雄は泣きくづをれしお季の耳側へ口を差寄せ「姉さん梅原の若さまがお出なすッたよ早くお目にお懸んなさい大變深切に心配して上さるよと私語く音聲は幽かなれど梅原と云ふ一ト言の早くも魂の緒に通せしか重き瞼を僅に見開き漸々馨を見遣りたれど敢果なき今の身を恥てにや再び兩の瞼を塞ぎ愁然とせる其の樣子頼み寡なく見るに ける馨はお季の變り果たる体を見遣り可憐しとも不敏とも云ふに云はれぬ胸の苦を漸うッと抑鎮め小隅の方に正体なく泣き伏し居る老僕眞助をちかく呼び之れに何事をか云ひ含めて直さま我が家へ引返させ其の身はお季の側へ寄り倩々顏を見詰めながら

ら、お季どの容が參ました思ひ依ぬ行違の爲め種々心配を惹たれど最早何事も明白になり御身に疑の無い次第は已に充分解ましたれば是より心強く思ひ早く全快して下さらねば不可ぬ……私も及ばずながら充分力を盡しますと眞情を絞つて云ひ出る聲の言葉はお季の耳に如何に嬉しく聞かれけん然れども最早や舌澁り思ふとも云ひ得ぬにや稍や色の變りたる口唇を動かして然も本意あり氣に笑みを洩しホロリと一ト雫轉ばすのみ之れを見る母舍弟の心も消に入るばかりなりけん思はずワッと泣く者に咽び所へ憂慮伏轉びぬ時に彼の眞助は凛々しき洋服扮裝なる一人の紳士を案内して喘き〳〵入り來たり恰度只今松野さまがお越になつた處ゆゑ概略の次第をお話し申し直さま御同道いたしましたと喜色を帶びつゝ陳べ出たり升も此の松野と云へる紳士は久しく獨逸國に留學せる醫學士にて馨とは舊君臣の間なり同窓の學友なり最も親しき間柄なれば已に眞助より概略の

次第を聞き余時朝の土產として是非とも非凡の腕を揮ひ其の危篤者を救ひし上馨に滿足を與へんと充分思ひ居るとなれば人々に會釋する程もなく直ちに進んで、お季の診察に憑りし處コハ衝動肺炎症にて已に施術の期を失し十死一生とも云ふ可き有樣なれど尙は脈搏上に聊か賴みとする處あれば夫れを力に自己が歐米の刀圭社會より新たに來たりたる新智識の治術を施こせし處天いまだ此の孝女を亡すに忍びざりけん良國手の施療ろの圖に當り己に絶なんとせし魂の緒を此所に再び呼び返し枯木重ねて春に逢ふお種道雄馨等の喜び何にか比喩ふ可き斯て是より後尙は松野の靈力にてお季の病氣は湯紙を剝ぐ如く一月ばかり經て目出度く全快するに至りしかば更に結ぶる緣の糸行く末永く榮ふる幸ひ是れもお季が孝行の德に歸く身の出世目出度かりける次第になん

反魂香終

明治二十六年三月二十日印刷
明治二十六年三月廿一日出版

編輯兼發行者　鈴木源四郎　小石川區掃除町三十三番地

印刷者　小林由造　小石川區掃除町三十三番地

發行所　礫川出版會社　小石川區掃除町三十三番地

賣捌所

日本橋區本石町二丁目　上田屋書店
淺草區三好町　大川屋書店
日本橋區通四丁目　金櫻堂書店
神田區表神保町　井上書店